

# 東京古田会ニュース

— 古田武彦と古代史を研究する会 — No.223 Jul.2025

http://tokyo-furutakai.com/

e-Mail: saitaka7078@yahoo.co.jp

代 表: 安彦 克己

編集発行: 事務局 〒212-0024 川崎市幸区塚越3-370 斎藤 隆雄 TEL/FAX 044-522-7500

郵便振替口座 00110-1-93080

年会費 4千円

口座名義 古田武彦と古代史を研究する会

## 目 次

- \* 「語部」と「語部録」の「和田家文書」その2 松山市 皆川恵子……………①
- \* 和田家文書忘備録13回  
『和田家文書の逆襲』  
港区 安彦克己……………③
- \* 東日流の子守唄「もうっこ」は  
何を指しているのか  
渋谷区 小島昌世……………④
- \* 語部と歩く東日流旅行  
仙台市 広幡 文……………⑦
- \* 旅の感想語り部と歩く東日流第2弾  
白井市 讚井優子……………⑪
- \* 東日流の旅の句  
東久留米市 村田智加子……………⑫
- \* 古代史エッセー86  
「邪馬台国」はなかったか  
日野市 橋高 修……………⑬
- \* 『隋書』倭国伝への一考察(上)  
「対等外交」は教科書から消えるのか  
世田谷区 國枝浩……………⑭
- \* 『旧唐書』倭国伝日本国伝と蝦夷国  
京都市 古賀達也……………⑰
- \* 藤原京・平城京出土の荷札木簡は  
何を示すか  
八尾市 服部静尚……………⑳
- \* 東京古田会」月例会報告⑫  
※文責: 新保 高之……………㉒
- \* 2025年度定時総会報告……………㉓
- \* お知らせ……………㉔

「語部」と「語部録」の  
「和田家文書」その2  
松山市 皆川恵子

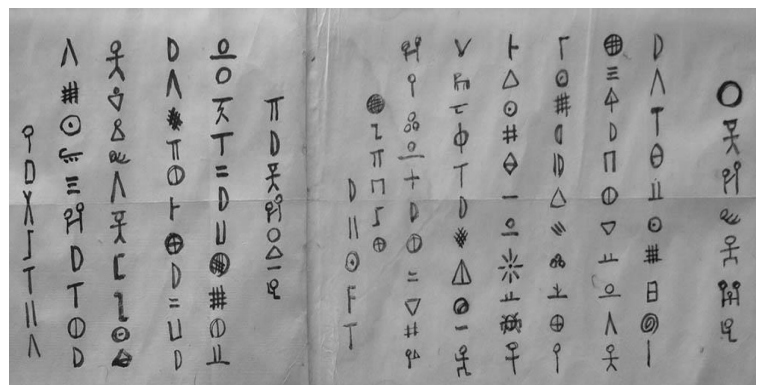
(222号よりの続きです)

### IV. 語部文字7種

史料10. 古代丑寅日本國語部録古字  
解譯 (丑寅日本史絵巻 第九卷記  
要『和田家文書コレクション』)

「本巻は丑寅日本國諸處に見付らる  
古代の土中に埋りて掘出されし土器  
石器らの表に遺されたる語部文字よ  
り歴史の事實を図画を以て衆に説く  
を旨とす。依て他史に見解を賴覺の  
勞を必要とせず、丑寅日本國住民が  
遺せし語部録を明細に解き、茲に明  
白實證すものなり。北端の地東日流  
にては語印にて地民耳用ゆるあり。

荷薩體及び閉伊にてはめぐら曆とて  
今に尚用ゆは語部印を以て要示せり。  
語部文字に七種あり。古きものは砂  
書、石を置きて意味通達す。語部文字  
にては山靱印・波斯印・蒙古印・紅毛  
人印・東日流印・宇曾利印を以てなり。  
是を併せたるを荒霸吐印とて後世に  
遺りたるものなり。倭の侵討伐にて  
丑寅の民は能く秘なる意趣を通達に  
用ひたるこそ安全たるに依りて永く  
地民に必要と相成れり。倭人に知ら  
れざる語部文字ありてこそ、此の國  
は山靱諸國に往来しその救済に商易  
にクリルタイ及びナアダムの民族集



合に彼の地に移住しまた歸化にも障  
り無く戦國の世まで自在たり。此の  
繪巻はかくある丑寅古代開化になる  
を語部録に求めて綴るを丑寅日本の  
實史として遺すものなり。  
寛政五年(1793年)七月二日 秋田  
孝季 和田長三郎  
史料11. 同上  
「語部印とは世襲に密として古代よ  
り丑寅日本民族の語らざる黙示史に  
して代々の史實を記せしものなり。  
康平五年厨川柵炎上以来、世は武家  
方にまた皇朝方にかたむき、奥州は  
平泉の乱以来倭人の駐住し、古来現

V. 語部文字の由来  
史料12. 知らずして世に生まれ

住の民は北域に追はれ、新地を拓きければそこも亦倭人の制にきわまり蝦夷と稱され生さず殺さざるの環に置きけり。ときに、語部印を以て元なる住民の通達の速達にして倭人の政動に先んずる對策相渡りて、住民の貢税謀るも空しきたり。常にして倭流に信仰を改むとも、一統信仰なる荒覇吐神を排斥せるも、信仰の要達は語部印にて、とどごとくたり。寛政五年(1793年)八月一日秋田孝季

VI. 語部文字の由来  
史料14. 無題 (遺訓 『和田家文書コレクシオン』)

(イシカカムイ伝 『和田家文書コレクシオン』)  
「抑々語部文字の由来は、山靱に発祥せるを、此の国に渡来し、住民能く是を用たり。古傳に曰く、語部文字の類、八種は代々にして加はれたるものなり。 延享乙丑年(1755年)二月四日 塚屋仁介」  
史料13. 渡島コタン録 (渡島古抄 『和田家文書コレクシオン』)  
「シユメールに於ては、ツグリス川亦はユーフラテス川岸の粘土に楔型文字を以て歴史の實を後世に遺したるより、後世のアツシリア更にバビロニア・ペルシア・トルコ・ギリシアまでも、文字と曰ふ草分を世に遺した先祖なり。東日流語部文字の原点に、古代カルデア民族の智識に由縁するものと覺つ置くべきなり。」  
語部文字は「山靱に發祥」した文字で、シユメールの楔形文字に由来するといふ。アツシリア、バビロニア、ペルシヤ、トルコ、ギリシヤの文字もこの楔形文字が基となつてゐる。「東日流語部文字の原点に古代カルデア民族の智識」があることを忘れるべからずと注意を喚起している。

VII. アラハバキ神信仰  
史料15. 『北鑑』第五十二卷の五

「然れども古語は今に通ぜず。語部に問ふべし。丑寅日本なる古語は山靱波斯なる古語に混ぜるありぬ。依て今に解せるは難し。語部録の成れるは支那前漢の高祖帝の壬寅八年十月二十七日、丑寅日本國大王津保化族の宇須麻と今に傳ふなり。語部第二編に成るは後漢の建武乙丑年六月十八日にして前後併せて二十八巻と曰ふ。」  
日本に渡来した民族を受け入れ、先住民との混血もあり、居住を拡大した部族ごとに文字を持つていたその長い歴史の中で、文字も変化していった。前漢の高祖帝の壬寅八年はBC109年。この年に丑寅日本國大王津保化族の宇須麻が初めて語部文字で語部録を綴つた。建武乙丑年AD29年には語部録28巻が創られた。その内容は宇宙の始まり、星の運行、荒覇吐神信仰、輪廻転生、歴史的出来事など多岐にわたる。

シユメールに興りしカルデア民のアラハバキ神とルガル神の理趣に基きて成れり。古代オリエントの諸宗教の起縁にあるは旧来の信仰に基かざるはなかりけり。信仰の根本となれるは宇宙の神秘に基けり。擴大なる宇宙には未知の天運あり。星もまた久遠に星座の変らざるはなかりき。星にも生と死ありぬ。老いたるは赤黄にまたゞき、青白きは若き星なり。



変らずと見ゆる大宇宙には常に星の生死あつて成れるを覚つべし。信仰を古きを迷信とせるは愚考にして、眞の理趣に及ばざるなり。吾が丑寅日本國の國神とて、もとよりイシカホノリガコのカムイありけるも、併せてアリハバキ神を信仰に加へたるは神を宇宙に大地に水の一切に祀る由因なり。即ち信仰に以て同意趣に在りけるは、信仰に異ならざる哲理と思想に在りぬ。古代シュメールの神アラは宇宙に在り。ハバキは大地にして、ルガルとは水の神に當れり。これぞ吾が古代神イシカ・ホノリ・ガコに寸分もたがはざる理趣たり。宇宙は日月星の阿僧祇の數に在り。その神祕を天なる神とし、是を號けてシュメールにてはアラと稱し、吾が國にてはイシカと曰ひり。次にはハバキ神なり。シュメールにては母なる大地と曰ふ意にして、吾が國にては嶽または大地の一切なり。次に

① シュメールのアラハバキ神…仏法の阿吽、修驗道の陰陽、アラハバキ神の雌雄は同じものである。アラハバキ信仰では仏法が現れる前にすでにこの哲理を理解し、信仰と結びつけた。新興の諸信仰は、古代シュメールに興つたカルデア人のアラハバキ神とルガル神の理趣に基づいている。

② 丑寅日本國の國神イシカ・ホノリ・ガコカムイ…アラハバキ信仰が伝わる以前に丑寅日本國の國神として、天の神イシカ・嶽または大地の一切の神ホノリ・水の神ガコを祀っていた。

③ 丑寅日本國の國神とシュメールのアラハバキ神を合体したアラハバキ・イシカ・ホノリ・ガコカムイ…広大な宇宙には無数の未知の天体があり、星にも生死があるという宇宙の神祕を天なる神アラと稱し、我が國ではイシカという。母なる大地の神をシュメールではハバキといい我が國ではホノリという。チグリス・ユウフラ

テイス川の川水また海の神と農耕の神をルガル神と稱し、我が國ではガコという。古代シュメールの神の概念と古代日本の神の概念が同じだったので、この二つの神を合わせて「アラハバキ・イシカ・ホノリ・ガコカムイ」と稱するようになった。

④ 五千年前にシュメールの神職ジハンが渡来帰化し5000年前に山靱民とともにシュメール人の神職ジハンがシュメールの信仰アラハバキ神をツボケ族に伝え、それから「アラハバキ・イシカ・ホノリ・ガコカムイ」と稱するようになった。

5000年以上前にすでに三内や外ヶ浜に邑(国)を作り居住していたツボケ族は、自然を神としたイシカ・ホノリ・ガコカムイを信仰していた。シュメールではウルク期(BC3500~BC3100)にあたり、文字の使用、ジグラート建設、都市國家の初期である。ジハンはアラハバキ信仰を布教するために日本に渡来永住したのではないだろうか。繁榮の尊高いツボケ族の邑三内、奥内へ行つてアラハバキ信仰を人々に教えたのではないか。信仰の根本が宇宙の神祕であるという教えはツボケ族の信仰と共鳴し、「アラハバキ・イシカ・ホノリ・ガコカムイ」として受け入れられた。

和田家文書忘備録 13回  
『和田家文書の逆襲』  
港区 安彦克己

2023年10月、古賀達也氏より電話が入った。  
「八王子古代史セミナーで上京した折、『東日流外三郡誌』を刊行した八幡書店の武田崇元社長に会うこととなりました。ご同行頂けると嬉しいです」旨の内容だった。  
筆者もかねて拙論をまとめて刊行したいとの意向を持っていたことや、古田武彦氏の九州王朝説に反論が出来ず、無視し続けてきた学者らが『和田家文書』は偽書であるとのキャンペーンを張り、氏を似非学者とおとしめ、NHKをはじめマスコミもあたたかも古田説など無かつたような報道に憤慨していたこと、また日頃『和田家文書』の散逸を懸念していたことから、同書店が『三郡誌』など関係書籍7巻を刊行した際の際の原稿となつた『明治写本』のその後の所在経緯を

シユメールという最先進國の宗教が日本の人々の人気をさらつたことは容易に想像される。宗教以外の先端知識ももちろん瞬時に広がつていったことだろう。  
(以下224号へ続きます)

お聞きするの3点から古賀氏と同行することとしました。

五反田の駅で待ち合わせ。11時に同社到着。武田社長は「12時過ぎ頃来社する」とのこと。

乱雑に本が積み上がったというテールを挟んで来訪の趣旨を伝えると、『和田家文書』の状況はどうなっているのか？「全貌社」なども噛んでいるらしいな。一連の『三郡誌』の出版元だから気にはしている。和田さんとは何回もあって、酒も飲んだ。亡くなつてからもうそんなに経つか。」

矢継ぎ早の質問に、「古代史学会に画期的な九州王朝説を紹介し、邪馬台国論争を終わらせた古田説に反論できないでいた学者が『東日流外三郡誌』を偽書と決めつけ、それに言及する古田先生をシカト、無視してきました。先生は亡くなられましたが、親しく近くにいた者としてそれが悔しくて仕方が無い。ここで『偽書派』に一撃を加えなければ、あの世で古田先生に合わす顔がない。そうしないと九州王朝説も消されてしまいます。」

『和田家文書』を研究すると今まで見えていなかった新たな歴史が見えてきます。古田先生の無念をはらす本を出版し、『偽書派』に一撃を加え、半生を苦渋に過ごした人たちに届け

たい」と提案。「それはうちで出版を引き受けましょう。原稿をメールでおくってください。本のタイトルは『東日流外三郡誌の逆襲』としよう」と、とんとん拍子に話が進み、帰路でのビールは格別でした。

古賀さんの編集構想で執筆者に依頼し、各々の原稿も集まり同社に送付し、連絡をまった。

しかし、なかなか次のステップに進まない。「もう一年以上もほっぽらかしですわ」と交わす。

今年2月古賀さんから「もう何回も武田社長に電話をしているのですが、埒があかない。私が電話すると険悪な状況になってしまいうほどです、安彦さんからも電話して催促してみてください。」との電話。

「どういう状況でしょうか？」

「今、確定申告で忙しくて」「大事な論文が含まれています。どうしても津軽地方の浄土宗の二人の学僧、佐藤瑞賢さんと開米智鑑さんの汚名を雪がなくてはならないので出版を進めていただきたい」と伝えました。

「汚名を雪ぐ」について少し解説しましょう。

『和田家文書』には金光上人に関する史料が多数あります。それに依拠して佐藤堅瑞、開米智鑑両師は研鑽を進め研究書を刊行しました。同文

書を偽書と決めつけた浄土宗は、『金光上人関係伝承資料集』（浄土宗総務庁教学局、一九九九）を刊行し、「和田文書」の章を設け両師の研究書を酷評し、批判は研究者としての人格にも及びました。

『資料集』編著者らは金光上人の入寂日に焦点を当てて論難します。

その論拠は法然上人の伝記『勅修御伝』（四十八巻伝）ともいう）にある

金光上人の記述ですが、著者舜昌が金光房と隆寛房を取り違えました。

筆者はこのことを発見し「東京古田会ニュース」に発表しました。この

誤りを浄土宗内部で八百年間も指摘できずにいたことから、編著者の論拠は破綻し、結果的に両師の名誉を傷つけ毀損してしまつたのです。

間違いを指摘した拙論を、『資料集』編著者他関係者に送付した結果、『和田家文書』の騒動を契機に『新纂浄土宗大辞典』を編纂し、従来の金光上人像を否定しようとしていたのが、担当した編著者は逆に『四十八巻伝四八』に『嘉禄三年、上人の門弟を国々に遣わされし』とある記述はあやまり」と書きました。『和田家文書』を認めたのです。

しかしこの事だけで、浄土宗での二師に対するネガティブな噂はとて

も払拭出来ません。なぜなら『資料集』が刊行されるまでは二師は地域社会

でも尊崇を集めていました。それを『資料集』が出たことで、御本人ばかりでなくその家族を巻き込んでその噂は広がり、従前からの評判は微塵に砕かれ東北地方の宗門を中心になお『和田家文書』『東日流外三郡誌』は偽書だとする偏見が深く沈殿しています。

今年4月に初稿のゲラが届き、各自が朱を入れ、5月には武田社長からは曜日や時間を厭わず電話がかかり6月には第2稿のゲラが届き、出版準備は確実に進んでいるところで

『東日流外三郡誌の逆襲』が刊行された暁には、いまだに手をこまねいている佐藤堅瑞、開米智鑑両師への宗門としての謝罪と金光像の再検討が進み、地域から二師とご家族が以前と変わらない生活が復活することを切に願っています。

**東日流の子守唄「もうつこ」は何を指しているのか**

渋谷区 小島 昌世

「語部と歩く東日流」という旅に参加した。会員ではないのに誘っていた。ちょうど芽生えの季節で、さまざまな色合いの緑と下生えの可憐な花々を楽しむことができた。

移動中のバスの中で 東日流の子守唄の歌詞が話題になったという。歌詞中の「もうっこ」という言葉が話題だったらしい。

【「もうっこ」をめぐる二様の解釈】  
手持ちの資料は以下の二つ。

資料① 「津軽の旋律 第一集」  
著者 木村 繁 (編・作曲)  
発行 陸奥新報社

昭和四十四年十一月十五日  
(初出盤は昭和二十六年日本ビクターより。昭和二十六年文部省小中学校鑑賞レコードに指定される)

子守唄 「もうっこ」歌詞

ねんねこ ねんねこ  
寝えたこへ  
寝んねば 山から  
もうっこア くらね  
姉さま育でだ 唐猫こ  
抱いだり おぼ(背負)たり  
まま(飯) 食へエで  
それでも 泣けば  
山さ捨ててで くる  
寝ろじゃ  
やえ やえ やえ

木村氏は故郷の民謡やわらべ唄が失われていくことを惜しみ、昭和二

十三年春から、農漁村をあるきまわり、おじいさんやおばあさんが歌ってくれる歌を採取した。それを西洋音階で編曲し発表した。その際に故郷津軽の言葉やこころを壊さないように、和音の選択などに深く配慮したという。

「津軽の旋律」は2枚組のレコードだが、しっかりと書物がついており、そこには収録された歌の歌詞とその曲についての木村氏の解説が載っている。直接、制作意図が書かれた文章は掲載されていない。

子守唄「もうっこ」の歌詞についての、木村氏の解説は次のようである。『もう』とか、『ももんがア』が妖怪を表示する音声だが、『もうっこ』は『こ』をつけて名詞化したもの、時には『もうも』ともいわれるが、『お化け』の意である

資料② 方言詩「吹雪(フギ)」  
詩集「まるめる」(1931年初版)所収  
作者 高木恭造(1903~1987)  
津軽弁の方言詩人・小説家・医師

ワラハド(子供等)エ  
グ(早)ぐど寝でまれ  
ほらア!  
あれア白いオウガメ(狼)ア吼えで  
ハ(馳)ケでア(歩)りてらんだド  
まぎのスマ(隅)がら  
死んだジコ(爺)ドババ(媪) 眺め

でるド  
ワラハド(子供等)エ  
グ(早)ぐど寝でまれ

「白い狼が吠える」とは雪混じりの強風が吹く虎落笛を指すというが、この詩の持つ強く生き生きとした調子からは、荒々しく動き回る動物の姿がイメージされる。後段の爺と媪についても姿が浮かぶ。詩人は、音のみの表現ではなく、具体的な動物の姿を表現していると考えられる。

この詩の力強い調子からは、子守唄とは別のものを意図していることが窺えるが、形式については、紛れもなく子守唄のそれを踏んでいる。子守唄の「もうっこ」に当たる部分は「白い狼」である。

「もうっこ」と「白い狼」との関係を探してみた。  
モンゴルの祖は Borte Chono (ボルテ・チノ)といわれている。モンゴル語の Chono は「狼」、borte は「白っぽい地に交わった暗灰色の班」という意味である。

高木氏の「白い狼」という表現は、ボルテ・チノ、すなわち蒙古をイメージしている。日本では「蒼い狼」と呼びならされているが、漢語の「蒼」には「松の葉のような深い青」という意味と「白っぽい灰色」という意味がある。高木氏の場合、後者と取っている

と思われる。  
高木氏にあっては「もうっこ」は抽象的な「怖いもの・お化け」ではなく、具体的な「蒙古の脅威」と捉えられている。

津軽の子守唄の歌詞「もうっこ」について、抽象と具体の、二様の解釈があることが分かる。

【文献に見る東日流の子守唄】

「もうっこ」という言葉がどこに由来するのか。人々にどのように捉えられてきたのかを、資料から探る。以下の資料は、安彦克己氏、増田達男氏から提供を受けた。

1974年 文永の役  
1981年 弘安の役

1993 「東日流検非違使庁覚書」(東日流外三郡誌)

この頃の東日流子守に蒙古唄流る  
オライのメゴア 泣くなデョー  
泣けば海から蒙古くるね  
泣かねば山からトトもどる  
泣くなデヤ泣くな…

注 トトとは出陣の父安東武士なり  
1645年

「安東船覚書」(東日流外三郡誌)  
安東水軍の隠岐、対馬の島民を救ひ  
東日流に多く移住せしは実相なり。  
おら家の めんこい子ア 泣くじやない  
泣けば 海から蒙古来る

泣くな 泣くじやない

かくの如く現に遺れる子守唄は、安東船に九死に一生を救われ来たりし、隠岐、対馬の島民が東日流外三郡に移住し、蒙古来襲の恐怖を子々孫々に子守唄として遺せり  
1569年

「十三水軍記」(東日流外三郡誌)

：風雨荒び元船散々に漂ひて、その一艦洋上幾十日、方舵を失いて吹浦沖にて安東水軍に救はる。

乗兵十人中八人皆高瀧人なれば、これを斬罪せず、十三湊に安養せしむに、他に一艦志丹舞に漂着し、元兵なれば住民を殺伐し、衣糧を奪い、女を犯し山中に籠り、永日に渡りて山添へにある村落を襲う事、暫しば…  
1791年

「東日流外三郡誌 第325巻」

古唄今に遺れるは次の如き子守唄なり。

おら家のめぐ子あ 泣くなぢやよ

泣けば山から蒙古来るね

泣かねば海から おともどる

泣くなぢやあ 泣くな

ねにやあ ねにやあ ねにやあや

泣けば海から蒙古あくるね

泣かねば山から おともどる

泣くなぢやあ ねにやあ

是の如く今に遺る蒙古襲来のことや、いかに。

1796年

「北鑑 23巻」

子守唄 泣く子に聞かす 東日流里

泣けば山から 蒙古来ると  
以上の資料から考えられることをのべる。

文字に残された記録に「もうっこ」の言葉は出てこない。これは記録者の意識が「元寇」にあり、唄ではなかつたということを表している。実際に子守唄が歌われる場合には「もうっこ」と音声化されることは十分にありうることで、記録の「蒙古」は唄の「もうっこ」と考えてよい。

信を置いていた安東水軍の壊滅的とも言える敗退の驚きと恐怖は大きく、子守たちの流行り歌となった。安東水軍に助けられ東日流に逃れた隠岐、対馬の住民は直接体験した元軍に対する恐れを唄った。これらの場合、「もうっこ」は当然海から来る。

東日流に流れ着いた元の敗兵たちは上陸し、近隣の村々を蹂躪する。この後から「もうっこ」は山から来るようになる。「山から来る」と「海から来る」が並行して歌われるが、「山」が先に来るのは、体験の生々しさから、当然であろう。

「北鑑・みちのく旅歌集」では「山から」の方が使われている。簡略の必要がある場合には「山から」が残り、

やがてそれが常となった。

以上、「語邑古伝記」が書かれた1800年ころまでの資料から見限り、東日流の子守唄の「もうっこ」は、抽象的な「怖いもの・妖怪、お化け」ではなく、具体的に「蒙古」を指していた。

### 【残った疑問】

「津軽の旋律」所収の子守唄「もうっこ」について言えば、取り上げた文献に書かれている子守唄とは、大きく趣を異にしている。

美しい歌である。演奏会の一曲に加えてなら遜色がない。支えているのは「姉さま育てた」から「まま食へで」、子育てのようすを描いた部分である。これがあるので、西洋の歌曲に劣らない、重みのある作品になった。

しかしこのことによつて、「もうっこ」は蒙古から離れてしまった。「怖いもの」を掲げるといふ東日流の子守唄の形式だけを残しながら、日常の子育ての場面を中心に据えることによつて、「蒙古」は脇に追いやられ、必然的に「怖いもの」という抽象的な存在となった。元寇という脅威の継承を唄った子守唄が、どのような過程で子育ての場面を歌うものに変化したのか。

木村氏の解説によれば「この中間

部分は、各人各様、一定していない」という。どのようなヴァリエーションがあったのか知りたところだが、その中から木村氏は、子育ての場面を選んだ。その結果、強い恐れを掻き立てながら、初期の段階では安東武士が、のちには父親が安全を守るといふ、子育てになくはならない「子どもの安心感」の保障も消えてしまった。そして子育ては、父親の責任を離れ、「姉さま」の仕事と化したのである。

これだけのドラスティックな変換が、1931年「まるめる」初版時から、1951年「津軽の旋律」初出盤までの短い期間に、どのようにして起こったのか。あるいはもつと前から変化は進められていたのか。関心を持たずにはいられない。

「津軽の旋律」第二巻には、高木恭造氏が自作の詩を朗読したものが収録されている。このことから木村氏と高木氏の間には交流があったことが伺える。「もうっこ」についての意見交換はなかったのだろうか。なぜ解釈が異なったのか。興味のわくところだが知る由もない。

### 【終わりに】

世界中の人々は、我が身に起こった重大な出来事を、生活に溶け込む形で後世に伝えている。カリブ海の

サンブラス諸島の女性たちがブラウスにする、モラという手作りの布のデザインに「空港ができた」というものがあつた。インドネシアのスンバ島では首狩族である祖先が戦って狩った敵の首が、織物の伝統的なデザインになっていた。東日流の人々は、元寇にまつわるあれこれを、誰もが聞き覚えるはずの子守唄に残した。

これらの仕事は、実生活に関わるできごとを、民間に伝承する役割をになつている。いずれも庶民が後世に伝える大切な記憶、すなわち「わたしたちの歴史」である。絶やすことなく伝えなければならぬ。

筆者は、集団の記憶は具体的であることによつて強いちからを持つと考へている。

広島には、被爆者の老齢化を前にして、語り部の役割を引き継ぐようとする若者たちがいる。彼らはそれぞれ「わたしは、くさんを引き継ぐ語り部です」と言つて、くさんの体験をそのまま伝えていく。

聴くものは、話の具体的な内容と自分とを重ねて、それぞれに多様な感情や考えを抱く。この多様であるということが、新しいちからとなる。

「原爆は悲惨」「平和はたいせつ」という抽象的な理解は「それはだれにでも分かること」として「おしまい」になり、人々の交流を生まない。具体

的な「語り」によつて生み出された多様な、聴くものによつて異なる反応が人々の対話を生み、新しいちからへと発展する。

東日流の子守唄が、具体的な記憶をもなつて歌い継がれることを願うものである。

(付記)

旅行中に宿で、秋田孝季集史研究会の増田達男さんが、話題の子守唄を歌つてくださった。「ほんとうは、めんこい娘さんが赤ん坊をおぶつて歌うがあで、わたしなどが歌う歌でないの」と前置きしながら。

どつしりとしたバスで歌われた子守唄には、流麗なソプラノで歌われるものとはまた別の、哀調と安らぎがあつた。けれども、少なからぬ違和感もあつた。

ねんねこしやつしやりませ  
寝た子の可愛さ 起きて泣く子のつらにくさ

ねんねこしやつしやりませ  
今日は二十五日さ あすはこの子の宮参り  
宮に参つたとき なんとゆうて拝むさ

一生この子のまめなよに(中国地方の子守唄)

この種の、優しい歌詞の子守唄で育てられ、わが子も育ててきた身には、東日流の子守唄はあまりに厳しい。怖いものを並べられ、寝についた子どもたちは、どんな夢を見るのだろうかと疑問に思つていたのである。けれども母親が子を思う気持ちで地方によつて違はずはない。愛しく思い、健やかに育ち、強く人生を生きていつてほしいと、等しく願つていくはずだ。

東日流の母親たちは、自分を害するものがあること、それがどのような形でどこから現れるかを、しっかりと伝えなければならなかつた。そして外敵に打ち勝つ力をつけてやらなければならぬという、歴史に基づく役割も担つていた。

「寝かしつける」という育児の営みは、親子の濃密な関わりのもとに行われる。この濃密な関わりを借りてこそ、厳しい役割を行ひ得たのではないか。

このように考えを変えることができたのは、何回も東日流を訪れ、自然を観察し、歴史を知つたこと。心優しい人々のお世話になり、あの、男声で歌つてさえも心安らぐ子守唄を聞かせていただいたことのおかげである。

語部と歩く東日流旅行

仙台市 広幡文

縄文遺跡満載の青森

五月十三日(火) J R新青森駅に集合したのが十七名。関東九名、仙台二名、愛媛一名、兵庫一名、青森四名。昨年十一月とは二〜三名顔ぶれが変わつていた。

J R新青森駅から最初に訪問したのが、三内丸山遺跡。私は三内丸山遺跡が発掘された翌年(一九九四年)訪問し、青森市内で開催されたシンポジウムにも参加した。一九九五年には、子供たちを連れて見学。三十年ぶりの三内丸山は発掘当時の様子とは全く異なり、それがまた新鮮な印象だった。

紀元前三〇〇〇年から二二〇〇年までの生活痕を残す三内丸山遺跡。当時、日本で最大の人口密集地が青森(その次が信州)というのだから驚き。今よりも暖かく、三内丸山のすぐ近くまで海が迫り、三内丸山から出てくる生活痕に海の幸が多いという説明も納得できた。

三内丸山で昼食休憩。赤飯に五穀のはいつた縄文っぽい昼食だった。今回の訪問で新たに知つたことは、有名な六本柱が夏至の日が昇る方向に向いているということ(青森の玉川さんの解説)。そして重要なのが、

夏至の日の沈む方角に石塔山神社があるということ。

### アラハバキ本社石塔山登山

次は今回の見学の中心地、石塔山。津軽半島の脊梁山脈を地元の人は「中山」と呼ぶが、三内丸山遺跡から見て西に二十度角の方向に魔ノ岳(四六六m)があり、その裏側に「石塔山」がある。

この石塔山は安倍・安東一族の聖地とされ、一九八七年安倍晋太郎・晋三親子が先祖の墓として参拝したこととはことに有名。前九年の役(十一世紀)で自害した安倍貞任の弟宗任が九州に流され、九州の地宗像大島で逝去するが、その末裔が安倍晋三とされる。

その石塔山が和田家文書では、アラハバキ神社の総本山として紹介される。和田家は代々石塔山の管理(管主)をしていた家である。

三内丸山の人々が夕暮れに石塔山に向かつて首を垂れていたという(玉川さん)のだから、三内丸山に住んでいた人々は、石塔山出身の人々に違いない。石塔山に近い中山山脈のふもと「大平山元遺跡」で日本一(世界一)古い縄文土器が発掘されたから、「大平山元→石塔山→三内丸山」という縄文人の北から南への移動が確認できる。

石塔山の神社にたどり着くには、バスから降りて小一時間ほど山に分け入る必要がある。五月中旬、青森は雪が解けたばかり。ところどころ泥や水につかる道で、長靴を用意してという事務局の案内は正解だった。

それにブヨがいっぱい、安彦会長が奥さんに頼んで用意した網頭巾に参加者皆が助けられた。

石塔山神社の屋根は雪の重さに耐えきれず壊れ、その近くの鳥居も壊れていたが、鳥居に「菊」の紋章が据えられていたのが印象的。「アラハバキ信仰」と「伊勢信仰」が菊の御紋で結びつくのは不思議。しかも、そのことが今回の東日流旅行で何度も体験させられる。

一日目の見学はこれで終わり。楽しい夕食交流となる。二次交流会で語り部玉川氏が強調する。「東日流に流れ来た安日彦・長髓彦を石塔山に迎えた東日流の人々は安日彦を王とする。」青森の人は自分の故郷をこのように誇れる。和田家文書・東日流外三郡誌がその源になっている。

### 宝森II安東船造船所

次は七里ガ浜出来島海岸の埋没林見学。二万八千年前の地層から発見され、氷河期最後の姿をとどめている遺跡。仙台市内にも同様の遺跡(富沢遺跡)があり、現在も保存・公開さ

れている。

七里ガ浜遺跡の次が宝森安東船造船所跡(推定)の見学。語り部玉川さんの解説を紹介する。

「(東日流外三郡誌によれば)安東一族が交易の道を作れたのは、安倍宗任が筑紫より六人の船大工を遣わしたから。一一一年に六人の船大工が宗像大島から津軽に来て、最初に作られた(高星丸)のが一一年四四年。

場所には広田湊川と記される。現在の五所川原市湊地区。そして一一四九年には十三浦中野里宝森に造船所を築いたと記される。その宝森地名が残っているのが、ここ中里町の宝森地区。」

十三湊(海沿い)から遠く離れた中山山脈のふもと中里町に、今も「昆布掛」のバス停がある。その「昆布掛」邑が外三郡誌にも記される。「十三湊が今のように狭くなくて広がっていた時代、日本海の荒波が中里まで及んでいた証拠」と、現在の語り部玉川さんが強調する。

宝森造船所跡の次は、市浦歴史民俗資料館。資料館は十三湖の中洲にあり、長い木造の橋を渡って歩いていく。下には大きな鯉が泳いでいて、時折泥煙をあげるの、しじみを取っているように思われた。

市浦歴史民俗資料館の展示は、十三湊を中心に安東氏の盛起衰弱を伝

えている。しかし玉川氏が指摘する

一四四〇―一四四一年の大津波の存在を資料館は否定する。写真では「中世と近世の境に分厚い泥状の堆積層がある」のに、それを「飛砂」と説明していくと解説。自己矛盾を抱えた解説なのに、それを理解できない人が歴史を伝えている。私は唾然とした。

### 安東氏の居城福島城

昼食で十三湊のしじみラーメンを食べたあと、安東氏の居城福島城を訪問。この福島城も三内丸山遺跡見学の一九九四年に、広幡は一人で訪問。一辺百八十mの四角形土塁(内郭)が衛星によって発見されたのが

発掘のきっかけ。いわゆるナビのない時代のナビ発見である。外郭は一辺1kmにも達する、日本中世居城で最大の城。城は十世紀に作られ、安東氏がこの城をおさえたのは十二世紀。前九年の役で敗れた安倍一族が津軽に逃れ、筑紫に流された宗任の力を借りて勢力を挽回し、十三湊を含む東日流を支配下におさめたのが十二世紀。

福島城に今、朽ち果てた城門(一九九〇年代の建築物)がある。そして周辺にはわらびがいっぱい生い茂り、コナラが大木の姿を見せていた。安倍・安東氏が前九年の役前から

津軽を支配していたわけではなかった。前九年の役に敗れ、岩手から落ち延びた安倍氏が石塔山を頼りに北上したとすればその理由はなんだったのか、旅行後安彦会長にその質問をした。すると丁寧な答えが返ってきた。

「安倍一族は前九年の戦いを遡ること8年前の天喜3年(1055)、頼時の命により末子八郎則任を東日流十三湊白鳥城に移住させており、東日流に安倍氏の根幹を布石していました。かつては白鳥城とも呼ばれた藤崎城には八幡宮の祠が現存しますが、当初は荒霸吐神を祀っていました。」

安倍・安東氏だけでなく、「安日彦・長髓彦」兄弟が紀元前七世紀に東日流に流れ来た歴史を考えると、悠久の歴史(一万六千年)を持つ東日流から日本各地に文化(情報)が広まった可能性が強い。日本の歴史がこれまでの常識「西から東へ」からまったく逆転する可能性がある。今回の津軽旅行・福島城再訪問が、私に新しい視点を作らせてくれた。

日本中世最大の城福島城の次が、東北最大規模の宗教施設、山王坊日吉(ひえ)神社。山王坊日吉神社は十四世紀の遺跡。安東氏興隆によって作られた施設。福島城と違って地元自治体が出して遺跡を復元しているが、いつの時代の遺跡かわから

ない、なんとも摩訶不思議な光景となっている。実は私はここを訪問してビックリ。宮城県大和町信楽寺跡にそっくりだったから。信楽寺跡も十四世紀の遺跡である。

次に訪問したのが、かつてアラハバキ神社と称した洗磯埼神社。ここには「少彦名命・大己貴命」が祀られている。しかも菊の紋章まである。菊の紋章も「少彦名命・大己貴命」も、宗像大社と一緒である。

この日は竜飛岬に宿泊。竜飛岬の刺身は最高。二次交流会も楽しかった。私は来年の旅行を秋田にしてほしいと安彦会長に頼んだ。秋田・横手市で、堀田柵以来の巨大な柵が見つかったからだ。秋田にある多くの柵が正史に登場しない。日本書紀・続日本紀に記される秋田城は今もって場所が不明。そんな摩訶不思議な秋田を旅したいと提案。安彦会長は、旅行の最後の日、秋田旅行を皆に提案してくれた。

### 大平山元遺跡

三日目は石川さゆりの津軽海峡冬景色の歌碑を見た後、津軽海峡に面した義経寺を訪問。義経はこの津軽海峡に面した寺で静養した後、舟で北海道に渡り、最終的にモンゴルに至ったとされる。

その次は竜飛岬とともに北海道に

突き出た高野崎を見学。竜飛岬より東の地にあり、日本海の風が直接当たらない場所だからか、竜飛岬より柔らかな風景をしていて、歩くだけで気分がよくなる。私は潮だまりに手を突っ込み、カニやヤドカリを捕まえ楽しんだ。ウニを見つけた人が「取ってほしい」と希望したが、一メートルほどの深さで、手を出すことは困難。ワカメを食べ、「おいしい」と喜ぶ人も。歴史ではなく、自然に触れるのも楽しい。高野崎には黒っぽい色の柱状節理があり、私は勝手に玄武岩と思い込んだ。

昼食は今別町のもずくうどん。とても不思議な触感で、おいしさ抜群のうどんだった。昼食後、本日のメイン見学、外ヶ浜町の大平山元遺跡。日本一古い一万六千年前の縄文土器が発見された場所。発見の手がかりが、この地に暮らす中学生が縄文前期の神子柴(みこしば)形石斧を発見していたから。それを知った専門家が縄文土器の発見を期待して学術調査し、一万六千年前の土器の発見につながった。発見された土器は私たちのイメージとは程遠く、小さな砂状の塊。作られたばかりの土器は十分な硬さを持っていなかったようだ。

私たちが見学している間、資料館の周りを草刈りしていた学芸員が草刈りをやめ私たちに近づいてきたので、私は質問した。「この遺跡はどれほどの期間使われていたのか」と。学芸員は答えてくれた。「長くて二十年。しかも定住ではなく、秋、そばを流れる蟹田川を遡上してくるサケを一年分捕えるために生活した場所と考えます。」

大平山元遺跡の解説によれば、ブナ・クリ・クルミなどの堅果類が豊富な冷温落葉広葉樹林がこの時代北海道南部―東北地方北部にあり、それらの堅果類採取と狩猟・漁労を組み合わせた生活が、この地の縄文文化を育てたとある。私もブナの実が好物で、秋山に行ったときは必ず拾ってきて、家で炒って食べるのが習慣だった(原発事故前)。そして今でもイワナを手づかみしている。生きた縄文人と言えるかも。

次は中世の山城尻八城址見学。見学といっても片道一時間近い山登り。案内板の記載距離がためらめで、本丸に近づくほど距離が案内板より長くなり、とても疲れる山登りだった。それでもキバナスミレやイカリソウ・マイヅルソウなど、かわいい花が迎えてくれた。

尻八城址は十三世紀安東氏が建造した山城で、十五世紀南部藩に落城させられる。一四四〇年代尻八落城後福島城も落ち、安東氏は北海道や



秋田に逃げ延びる。秋田で安東氏は秋田氏を名乗ることとなる。「一四四〇年—一四四一年の大津波で大被害を受け、力の衰え

た安東氏を南部藩は滅ぼしたが、結局津軽を支配することはできなかった」と、玉川さんは解説する。

思わぬ山登りで疲れ切って青森駅前のホテルに着いたが、おかげでおいしい生ビールとなった。

### 環状列石の小牧野遺跡

四日もすばらしい見学先が用意されていた。今から四千年前縄文後期の環状列石小牧野遺跡。小牧野遺跡も大平山元遺跡のように、当時高校生だった人物が畑から安山岩の大岩がいつぱい出てくることに疑問を感じて遺跡発掘したのがきっかけ。最初に発見した高校生は今も役所に勤務し、小牧野くんと呼ばれている。展示館は閉校になった小学校を改修。その展示館で強調しているのが

石棺墓。亡くなった遺体を石棺におさめ、遺骨だけになったら甕棺土器に移し、また石棺墓に埋める。要するに二度の埋葬である。ほかに土葬墓があり、また秋田県大湯環状列石のように環状列石の内輪・外輪の中に直接埋める遺体もあった。この説明を聞いて、私は縄文時代に既に支配・被支配の関係が生まれていたと実感。縄文は平和な時代、そんな夢の世界が私の心で終わった。

なお小牧野遺跡には今もクルミの実がころがっているが、昔はクリ林が大きく広がっていたという。三内丸山に似た状況。石塔山遺跡を訪ねた時どうしてこんな山の中なのか疑問に感じたが、縄文の遺跡はすべて山の中なのだ、やつと納得できた。

小牧野遺跡環状列石の内輪・外輪の中に、大石を特別に組んだ場所が何か所がある。その特別な方向を環状列石の中心石から見ると、岩木山や石塔山・三内丸山など重要な景観や遺跡に重なる。すなわち、小牧野遺跡は「大平山元—石塔山—三内丸山—小牧野」と続く縄文文化の継承地。

そして八戸市是川遺跡へと縄文文化は続く。是川では三内丸山遺跡と同様漆製品が多数出土し、現在の二戸の漆に受け継がれる。岩手県二戸地方の漆生産は現在日本で七割を占める。

遮光器土偶帽をかぶって小牧野遺跡を紹介してくれた女性案内人は、とても元気な平内町のほたて漁師。私たちが平内で昼食を食べると言ったら、とても喜んでくれた。この女性案内人の元気が古田会参加者に伝わり、連日の疲れをいやしてくれた。

次は浅虫温泉を越え、小湊・十王院平内総鎮護雷雷宮。玉川さんの解説によれば神社の紋は「三つ巴」。次に案内される善知鳥神社(うとう神社)も「三つ巴」。この「三つ巴」がアラハバキの象徴だという。

そう言われても、私は興味が湧かない。それより仙台市の蒲生海岸よりも広い小湊干潟(四六ヘクター)が、私の眼に飛び込んできた。その干潟に中洲があり、木造の橋がある。私はその中洲を見学したいと希望、実現した。中洲から周りを見ると、羽根を怪我した大白鳥が一羽羽根を広げている。一羽でここに残るのは大変

と思いきや、妻らしき白鳥と子どもらしき白鳥も見えた。白鳥の愛情はすごい。

自分の立っている中洲に、カニの残骸がいつぱい。こんなおいしいものを食べているのかと、白鳥がうらやましくなる。「白鳥は、悲しからずや、空の青、海の青にも、染まらずだよ」。若山牧水の歌が口に出た。怪我した白鳥を支える家族がいること

で、私の心は満足した。

最後は青森市内の善知鳥神社(うとう神社)。ここも三つ巴の紋章。允恭時代、善知鳥中納言安方が勅勘を受けて外ヶ浜に蟄居していた時に高倉明神の霊夢に感じて干潟に小さな祠を建設し、宗像三神を祀ったのが神社の起りりと伝わる。ここでも宗像大社との共通点が示される。

実は私広幡は、「宗像II大倭(大和)」説なので、善知鳥神社成立で宗像三神が祀られることは当たり前。四く五世紀の允恭時代、東日流と宗像がつながっていたという語部伝説を、私はすなおに受け入れられる。

この善知鳥神社(うとう神社)が後に青森の中心地となる。仲の悪い津軽藩と南部藩のど真ん中安方に、明治時代県庁が作られたのだ。

### 旅の終わりに

耳に残った玉川さんの話を中心に、東日流旅行を記した。前回よりも見学地の資料や関連する和商家文書の資料が少なく、書いたことに自信がない。ただ私自身は、青森が九州筑紫よりも古い歴史を持っているということを実感し、歴史は「東から西へ」が真実だと思えるようになった。その根源が「クリ・クルミ・ブナ」。ブナの原生林白神が世界遺産になり、北東北縄文遺跡が世界遺産になった。

東北秋田に生まれて、自分は幸せ。そんな四日間だった。

なお広幡家の家系図では、広幡は北畠親房とともに奥州入りし、京都に残った広幡家の広幡忠朝が明治時代宮内省で侍従を勤める。秋田の広幡家は秋田市で寺を営んでいる。私の家系は秋田県大仙市清水で十三代にわたって修験道をし、月山信仰の講で生きてきた。最後は清水の春日大社の宮司となり、漢方医学で飯を食っていた。

最後に、今回の旅行で、安倍宗任の時代だけでなくその後長きにわたって、和田家文書や青森が宗像菊の御紋を含むとの接点が多いことを知った。この現象をどうとらえるべきか、宗像II大倭(大和説)の広幡に課された研究課題とうけとめたい。

二〇二五年六月二十九日

## 旅の感想 語り部と歩く東日流 第2弾

白井市 讚井優子

「はじめに」東日流は、秘められた歴史の宝庫です。5月13日から3泊4日で、第2弾の旅に参加してきました。津軽平野は田植えの真最中。頭に雪を被ったお岩木山が水を張った広い田に映ってとてもきれいでした。

東日流の歴史の深さ・豊かさに驚くばかりですが、まだ見たりないというのが率直な感想です。印象に残ったことを旅の感想とともにお伝えします。

### 「1」石塔山神社登拝 5/13

旅前に、玉川さんが調査を何回もさされて、前日長靴用意の指令が出ました。この冬は雪が大変深かったため、雪解け水が多いということでした。また、ブヨも沢山いるそうなので、長袖や帽子着用、手ぬぐい等首元を覆うこと等の指令が出ました。石塔山は標高300mほど。バスで登山道入り口まで行きました。そこで身づくろいして出発。登ったり下りたり、水芭蕉の咲いている湿



地を見たり、雪解け水の小流に足を取られそうになりながら、アラハバキ神社に着。地図には「坪毛沢」「石ノ塔沢」が記入されている

ます。岩木山の噴火で、この石塔山に逃げてきたアソベ族の人は、命からがらだった事でしよう。ここに逃れた少数の人が生き残ることができた。和田家文書は伝えます。その石塔山が聖地となり、小さな墳墓(一人一人が入るくらい)の大きさ)が山の斜面の、あちらこちらにある中で、「役の小角」の墓は少し高く盛ってありました。安倍安藤家がお参りし、墳墓を守ったのではないのでしょうか。この冬の大雪で、神社も一層荒れているのが気になりました。元祖樹木葬の聖地だと思いました。アラハバキ信仰を恐れた津軽藩によって、アラハバキ神社(地図上は十和田神社)の前の神門の岩を、藩の寺社方により火薬で壊されたそうです。強権による信仰の弾圧です。しかし、その後も安東一族に信仰は守られ、お参りは続いたとのこと。(北鑑第10巻)

### 「2」北海道・北東北縄文遺跡群(ユネスコ世界文化遺産)から3カ所訪問

どの遺跡も情報が豊富、展示館や案内係もしっかりしていました。さすがに、ユネスコの世界文化遺産として登録されただけではありません(2021年)。3カ所を見ましたが、長い縄文時代を体感してきました。なお北海道・北東北縄文遺跡群の紹介はウェブで分かりやすく紹介されています。

(大平山元(おおだいやまもと)遺跡 縄文草創期 16500年前 5/16)長期定住の跡は見られず、近くの台地下を流れ、陸奥湾にそそぐ蟹田川の石(頁岩)を用いて石器を作っていた遺跡。標高26mの河岸段丘上に位置しています。小学生が発見のきっかけを作ったそうです。旧石器時代から縄文草創期にかけての貴重な遺跡で、未発掘の部分を残しており、今後の研究を待つそうです。(三内丸山遺跡 縄文時代前期から中期 5/18)豊富な出土遺物、見上げるような高さの六本柱の塔。太い柱は直径約1m。樹齢は200年を越しているのではないのでしょうか。栗の木は成長が早いのですが、これだけの栗の大木が生えていた自然環境は、現在とは随分異なります。(因みに復元された6本柱は、ロシアからの輸入品。栗の大木がロシアには残っている)私は大型板状土偶の細面の三内丸山人(神?)に見入ってしまいました。中高生のころ、縄文人と言えば丸顔、弥生人は朝鮮半島から来た細面、と言われておりました。当時は単純な分類でした。板状土偶の人は丸顔ではなく、また細面ともちがいが、顎の細い逆三角形の細面。私の父親も(福島県磐城の生まれ)三角形の細面でした。親近感を覚えました。(小牧野遺跡 縄文時代後期前半 5/16)八甲田山

西麓に広がる荒川と入内川に挟まれた、青森平野を一望できる舌状台地（80〜160m）上に立地しています。独特の石組の環状列石（小牧野式配列と名付けられる）は三重構造、直径55mにもなります。地元の高校生グループが、この環状列石を発見したそうです。

〔3〕中世安東水軍の跡 宝森〔5〕  
宝森という地名が今も残っている、安東氏の造船所ではないかと考えられる場所に行きました。十三湖の水が、いわばドッグのように細い谷あいに入り、安倍宗任の九州から遣わした造船技術者が指導して、竜骨を持った大きい安東船を作った場所ではないかと思われる地域です。宝の木は、水に強い青森ヒバでしょうか。水は現在は引いています。〈中の島市浦村歴史民俗資料館 〔5〕〉 十三湖の小島の松林の中に資料館はありました。縄文土器をはじめ、中世安東氏や、安東船・中国船による国内や海外との交易など、わかりやすくパネル表示されていました。現在島全体が充実した設備のあるキャンプ場になっています。島に渡る木橋もログハウスも、青森ヒバだそうです。

著 昭和60年）によれば、「昭和60年東京大学の江上波夫教授らの発掘調査で外堀、内堀、土塁跡のほか門址や柵柱列が発見された。その報告によれば以下のとおり。城域62万5千平米、本丸は全体の十分の一に相当する6万平米、東西南北を土塁で囲まれ、外側一帯には堀を巡らしていた。柵柱列の発見により、外郭は柵で囲まれていたと推測されている。」また葛西氏は、おなじ本で、次のように述べます。「安日彦・長髓彦の一族が十三浦に落ちて砦を築き、これを「稲城（いなぎ）」と称したことに始まり、古代から開かれ、中世安東氏に至るまで、活躍した安東氏の中心の城郭：「古い歴史の詰まった遺跡の様です。」〈山王日吉神社 5/14〉市浦・その歴史を訪ねて』前述の本には、市浦の山王日枝神社は、安東氏の圧倒的な財力を元に設立された、神仏習合の一大霊場の跡だそうです。今後の発掘が待たれるとか。〈尻八館 〔5〕〉アイヌのチャンを利用して、安東氏が造った中世山城跡です。南部氏との戦いに敗れ安東氏が去った後、南部氏が城を一部改修し使っていたとの報告もあります。急斜面には、ロープが張られ、それを使って登りました。中世の武人の体力に驚愕しました。中世の山城は本当に、険しいです。〈銀杏の巨樹について〉銀杏は

世紀末、中国からもたらされました。青森県には銀杏の巨樹が18本ほどあります。全国では180本です。青森は1割を占めます。『海をわたった華花』国立歴史民俗博物館（2004年より）安東氏が、中国から運んできたのではないかと、私は推測します。十三湖、深浦、黄金崎、大湊、小湊、下北の安倍城等、安東水軍の大ernaな港には、幹周8m以上の大イチョウがあります。（前述の本、分布図より） 去年の旅で見た日本一と言われる、黄金崎大イチョウを思い出しながら、安東水軍との関係に思いを馳せました。

「おわりに」旅の終わりは、小湊・十王院と白鳥の飛来地。天気にも恵まれ穏やかな陸奥湾は、心地よく、いつまでも眺めていたいと思えました。夏泊半島の西側、浅虫の善知鳥崎で帆立料理を堪能しました。なお浅虫の善知鳥崎の名称について、青森郷土博物館ブログには以下のように紹介されており、「13世紀末頃、奥州平泉の藤原泰衡の郎党である大河兼任が立てこもって、頼朝が差し向けた追討軍と戦った場所、『有多宇末井之梯（うとうまいのかげはし）』であると言われ、古くから名所として伝えられてきた地」と紹介。江戸時代後期に描かれた「鳥頭前棧図」（百川学庵筆『津軽図譜』より）と共にブログに載せています。『有多宇末井』とは、アイヌ語で「つきでたもの」という意味があるそうです。世阿弥作とされる能『善知鳥』は、仏教思想が濃く、殺生を諫めるあまり、シテの獵師が救われぬ陰惨な内容です。私が感じた『善知鳥崎』とは異なる印象でしたので、少し調べてみました。中世都の人を感じる奥州の奥地には、残酷な殺生をする人々が住んでいるというイメージがあったのかもしれない。（了）

### 東日流の旅の句

東久留米市 村田智加子

- ◇ 縄文の村たんぼの原の中
- ◇ 春山の奥に古代の王の墓
- ◇ 陸奥の春の社の菊御紋
- ◇ 昆布掛は語部の里春の海
- ◇ 夏浜に太古の姿埋没林
- ◇ 花林檎見つつ津軽の史跡旅
- ◇ 史跡見て蕨も摘みて津軽旅
- ◇ マイズルソウ砦の山に密やかに
- ◇ 弥三郎節も唄ひし春の宴
- ◇ 遺跡より雪の八甲田を拝す
- ◇ 善知鳥（うとう）てふ春の社に手古奈の碑

\*手古奈は帝大医学部出身の俳人高浜虚子の弟子で、今回同行の弘前の増田さんは手古奈の息子さんです。

【「邪馬壹国」か「邪馬臺国」か】

古田武彦氏は、『三國志』魏志東夷伝倭人条（以下、魏志倭人伝）に出てくる女王国の中心地の国名が「邪馬台（臺）国」ではなく、「邪馬壹国」と記されていることに注目し、邪馬台国↓ヤマト国↓大和とつなげて邪馬台国大和説を成立させている先行研究に対して否定的な見解を提示した。国名の類似を大きな論拠の一つとしていた大和説論者にとっては都合の悪い主張だったにちがいない。陳寿原本に記されていたのが「邪馬壹国」であっても「邪馬臺国」であっても国名表記の違いに過ぎないが、古田氏は大和説を否定するための象徴として「邪馬壹国」に注目し、著作のタイトルを『邪馬台国』はなかった」とした。古田氏の「邪馬壹国」説は、中国文献に登場する卑弥呼の支配する国が、記・紀に描かれた大和王権とは全く違う系統の独立国家だったことを我々に気づかせてくれた。

しかし古田氏が注目した「邪馬壹国」の表記は、あくまでも宋の紹興年間（1131年～1162年）に作成された版本に記されていたものだった。

古田氏が「邪馬壹国」論を世に問う

てから半世紀以上が経過した今、たとえ陳寿原本に「邪馬壹国」と記されていないなかったとしても、古田氏が提唱した紹興本「邪馬壹国」説が邪馬臺国をよりどころにした大和説を否定して、卑弥呼の国を皇国史観から解放する役割を果たした功績は大きい。当論考では荻上紘一氏（大学セミナーハウス理事長）から受けた教示を参考にして、陳寿原本には、「邪馬壹国」、「邪馬臺国」のどちらが記されていたのかを検討してみようと思う。

『三國志』、『後漢書』、『隋書』からの引用は岩波文庫版に採用されている百衲本の影印を参考にした。

【宋・元時代の版本には「邪馬壹国」】

『三國志』の版本は百衲本、武英殿本、金陵活字本、江南書局本が確認されているが、現存する版本には全て「邪馬壹国」と記されているという。しかしこのことは西晋時代に陳寿が『三國志』に「邪馬壹国」と記していたことを意味しない。なぜなら陳寿が書いてから各版本が宋（960-1279年）以降の時代に出来上がるまでの約千年の間に写本が繰り返されてきたと考えられるからである。

【『三國志』、『後漢書』、『隋書』では】

『三國志』 魏志倭人伝  
『南至邪馬壹国女王之所都』  
『後漢書』 倭国伝

「其大倭王居邪馬臺国案今名邪摩惟

音之訛也」

『隋書』 倭国伝

「都於邪摩堆即魏志所謂邪馬臺者也」

『三國志』は西晋（280年以降）時代、『後漢書』は南朝宋（420年以降）時代、『隋書』は唐（618年）時代に

原本が完成したと言われている。『三國志』の約150年後に完成した『後漢書』には「邪馬臺国」と記され、「邪馬臺」は「邪摩惟（ヤマキ）音」の訛（＝なまり）ではないかと分注がほどこされている。『後漢書』の

編者は「邪馬臺国」と記された書物（魏志倭人伝か）を見て記している。『隋書』は『三國志』完成の約380年後に編纂されているが、「倭国伝」に「邪摩堆は魏志に記されている邪馬臺のことである」と明記している。

『隋書』が編纂された頃に通用していた魏志倭人伝には「邪馬臺国」と記されていたことを証言している。

【考察】

以上が現在残されている該当史料の大きな実態である。

『後漢書』が完成された南朝宋と、『隋書』が編纂された唐の時代には、「邪馬臺国」と記された魏志倭人伝が存在していたことは間違いない。

宋になり木版技術が開発され正史の版本が作成される頃、版本作成の元となった写本には「邪馬壹国」と記されていたことも確かだろう。

このふたつの事実から以下のことが推察される。

『後漢書』倭国伝と『隋書』倭国伝の記述から、陳寿が記した『三國志』魏志倭人伝の原本には「邪馬臺国」と記されており、『隋書』完成後から木版印刷が隆盛期を迎える宋になるころまでの約300年の間に、「邪馬臺国」を「邪馬壹国」と書きかえた（あるいは写し間違えた）状態の写本が出現し、その写本によって作成された版木による印刷が行われた。

もし陳寿が「邪馬壹国」と記していたとすると、『後漢書』完成までの間に「壹」から「臺」に、「隋書」編纂から宋代までの間に「臺」から「壹」に、二度の書きかえが行われて元に戻ったことになる。同一ヶ所でも二度の書きかえが行われてもともにもどる可能性はよほどの理由がない限り現実的ではないと言わざるを得ない。

結論としては、『三國志』魏志倭人伝、『後漢書』倭国伝、『隋書』倭国伝の記述から考えて、魏志倭人伝の原本には「邪馬臺国」と記されていたと考えるのが順当であろう。

我々が見ることができるとは、宋代以降の版本しかないので、正確な判断を下すことは難しいが、国名表記がどちらであっても所在地問題を含めて卑弥呼の国の歴史的な位置づけにさほどの影響はないと考える。

『隋書』倭国伝への一考察(上)  
―「対等外交」は教科書から消えるのか―

世田谷区 國枝浩

『隋書』倭国伝、大業三年条の次の文章はあまりにも有名だ。

大業三年 其王多利思比孤遣使朝貢使者曰 海西菩薩天子重興佛法 故遣朝拜

兼沙問數十人來學佛法 其国書曰日出處天子致書日没處天子無恙云々帝覽之不悅

謂鴻臚卿曰 蛮夷書有無札者 勿復以聞 明年 上遣文林郎裴清使於倭国

(本稿では以下、これを「対等外交の国書」、あるいは「天子対天子の書」と呼ぶ。)

私は『隋書』の多利思比(北)孤による「天子対天子の書」は「対等外交」の姿勢を表明したものと習い、またそれが正しい歴史だと考えてきた。

(注1)そして現在も『隋書の倭国伝』の国書は「対等外交」の書であるという解釈は生きていると考えている。

ところが近年、「対等外交」に対してそれを否定する、あるいは対等という言葉を使わずに「より消極的な」、あるいは「ぼかすような」言葉遣いがある

現れている。私はそのことに何気なく開いた高校の教科書から気づいた。

「対等外交」の立場が危うくなっているのではないか。教科書を扱う書店に行き調べてみた。また、教科書の図書館があることを知り出かけた(注2)。

(注1) 拙稿「倭国の遣使先と遣使姿勢」東京古田会ニュースNo.222を参照のこと。

この続編が本稿ともいえる。(注2) 正式名称は「公益財団」教科書研究センター附属教科書図書館という。

月曜・火曜・水曜の9時30分〜16時30分開館。江東区千石一―九一―二八、

〒131-0331 03-5606-4314。戦前の教科書から最新の教科書まで。

本稿では過去の「対等外交の国書」に対する学校教科書類を通してその変化を確認し、次いで、教科書類の変化に影響を及ぼしていると思われる幾つかの研究論文を調べ、私なりの考察を加えてみたい。

第一節 資料：教科書類における『隋書』倭国伝

1. 教科書類の動向 以下、出版社名だけで書籍名が無いのが教科書である

○小学生用

・1962(昭和37)年 東京書籍 中国に負けないように、進んだ文化

を取り入れることに努めた

・発行年不明 中京出版 研究員用 対等な立場

・1982(昭和57)年 日本書籍 小6社会 隋と対等な立場で外交を進める

・2023(令和5)年 東京書籍 新しい社会 6 24頁

隋との対等な関係を結ぼうとしたと考えられています

・2023(令和5)年最新資料 光文書院 社会科資料集6年 46頁

大国の中国(隋)を相手に、小国の日本が対等の外交を行おうとしたことに、隋の皇帝は激怒した

・2025(令和7)年 東京書籍 国書を資料として示す。隋に独立した国として認められようと考えられています。

・2025(令和7)年 教育出版 進んだ政治のしくみや文化を取り入れようとして小野妹子らを遣隋使として送る。

・2025(令和7)年 日本文教出版 対等な国の交わりを結ぼうとした。小学生用の多くは、教科書は対等を記す。「独立した国」も対等関係であらう。

○中学生用

・1955・1970(昭和30・45)年 大阪書籍 強国隋に向かっ

て対等の交わりを結び、独立国の面目を保とうと考えた

・1972・1976(昭和47・51)年 学校図書 初めて対等の態度で国交に臨んだ

・1977(昭和52)年 東京書籍 古くからのならわしを改めて中国と対等の外交を行おうと努めた

・1977・1978(昭和52・53)年 大阪書院 「対等」には触れず

・1981・2012(昭和56・平成18)年 清水書院 中国と対等の関係を結ぼうとした

・1981(昭和56)年 東京書籍 「対等」には触れず

・2016(平成28) 1981(昭和56)年 清水書院 「対等」は記されていない

・2022(令和4)年 山川出版社 中学歴史 日本と世界 37頁 倭と隋が対等な形式で書かれたため無

礼とされたが、高句麗との関係で国交は続く

・2025(令和7)年 史料あり。帝国書院 隋の進んだ政治のしくみや文化を取り入れるため、正式な国交を目指した。

・2025(令和7)年 教育出版 史書あり。中国から、進んだ文化を取り入れようとして小野妹子らを遣隋使として派遣した。

・2025(令和7)年 教育出版 史書あり。中国から、進んだ文化を取り入れようとして小野妹子らを遣隋使として派遣した。

・2025 (令和7)年 史料あり。  
ヤマト王権は、中国を統一した隋に  
使節を送り、国交を結んだ。

・2025 (令和7)年 史料無し。  
600年の遣隋使あり。小野妹子を  
遣隋使として派遣。

・2025 (令和7)年 東京書籍  
史料無し。隋の進んだ制度や文化を  
取り入れようと小野妹子たちを送つ  
た。

・2025 (令和7)年 育鵬社 6  
07年には、隋の皇帝にあてた手紙  
で、倭が隋と**対等**な国であることを  
強調し、隋の皇帝は激怒。

・2025 (令和7)年 自由社 国  
書あり。太子は、手紙の文面で**対等**の  
立場を強調することで、隋に服属し  
ない決意を表明。これを聖徳太子の  
隋に対する**対等外交**という。

中学生用の教科書類は1900年代  
までは「**対等**」と記すものが多かった  
が、現在は少数になりつつある。

### ○高校生用

・1963〜2008 (昭和37〜平  
成20)年 清水書院 隋に対して  
**対等**な立場を主張

・2014〜2022 (平成26〜令  
和4)年 清水書院 「**対等**」は記さ  
れていない。「無礼な国書だ」と怒る  
が、高句麗との関係で国交は続く。

・1963〜1978 (昭和38〜5

3)年 帝国書院 大帝国隋と**対等**  
な立場で発言し煬帝怒るが、高句麗  
との関係で国交は続く

・1967 (昭和42)年 中教出版  
太子が**対等**の外交をめざしたことは、  
隋帝にあてた国書を見ても明らか

・1969 (昭和44年) 日本書院  
**対等**の外交を開いて、国際的地位を  
高める

・1995 (平成7)年 帝国書院  
「**対等**」には触れず

・1996〜2008 (平成8〜20)  
年 山川出版社 **対等**な立場

・2003〜2018 (平成15〜3  
0)年 山川出版社 「**対等**」は消え  
る。国書は煬帝の不興をかったが、翌  
年には裴世清を遣わし国交は継続し  
た。中国皇帝に臣従しない形式をと  
り、無礼とされた。

・1998 (平成10)年、2017  
(平成29)年 山川出版社 『詳説  
日本史研究』 53頁 倭国の大王  
が天子と自称しことに対して、隋の  
皇帝容態が不快の念を示したという。

「これを**対等**の外交をめざしたと考  
えるのは問題がありあくまで朝貢外  
交の枠内のものであった。」しかしな  
がら、遣隋使の派遣がこれまでの卑  
弥呼や倭の五王の時代の外交と異な  
るのは、このときの倭国の大王が、中

国の皇帝に冊封を求めなかったとい  
うことである。倭国の大王は、中国の

皇帝から自立した君主であることを  
隋から認定されることによって、中  
国皇帝から冊封を受けている朝鮮諸  
国に対する優位性を示そうとしたこ  
とにある。

・2023 (令和5)年 山川出版社  
『日本史用語集』 まず、この時点で  
は「**対等外交**」という項目は存在しな  
い。それも当然である。25頁の「遣  
隋使」の項目には、朝鮮三国に対する  
優位性を保つため中国皇帝に臣従し  
ない形式をとったと記されているか  
らである。

・2024 (令和6)年 実教出版  
精選 日本史 探求 26頁  
隋の皇帝と**対等**な関係を示すものと  
して隋の煬帝の怒りを買ったという。  
高句麗との関係で国交は続く

・2024 (令和6)年 東京書籍  
倭の五王とは異なり、隋の皇帝に臣  
従しない書式であったため、隋の煬  
帝の怒りを買ったという。高句麗と  
の関係で国交は続く

・2024 (令和6)年 山川出版社  
国書あり。隋への国書では、倭の五王  
とは異なり、隋に服属しない立場を  
主張しようとしたが、隋の皇帝から  
は無礼とされた。

・2025 (令和7)年 山川出版社  
『詳説日本史』国書は倭の五王時代  
とは異なり、中国皇帝に臣属しない  
形式をとり、煬帝から無礼とされた。

・2025 (令和7)年 清水書院  
600年にも遣隋使。607年、隋の  
皇帝に臣従しない書式の国書提出。

卑弥呼や倭の五王と違い、中国皇帝  
の冊封を受けなかった事を意味する。  
・2025 (令和7)年 第一学習社

600年の遣隋使あり。国書あり。  
「日出づるゝつつがなきや」は仏教  
經典の用語。607年に小野妹子を  
遣隋使として送り、留学生や僧侶を  
派遣して中国の文明を学ばせた。

古い高校教科書には「**対等**」が目  
につくが、近年、高校の教科書からは  
「**対等**」という言葉が使われなくな  
っている。私が調べられた範囲では、

「**対等**」の用語が使われた唯一の例  
は、2024年の実教出版のもので  
ある。「**対等**」とほとんど同一と思わ  
れる「臣従・臣属・服属しない」「自  
立した」などは「**対等**」という用語を  
避けようとしているのではないかと  
も思われる。また、2025年発行の

第一学習社で「**仏教**」を意識している  
点が注目される。遣隋使と**仏教**の強  
調という問題は第二節での主要なテ  
ーマになる。

### 2. 現在の教科書の状況について、お よび「新たな教科書問題」

「1. 資料」で見たように、小学校の  
教科書ではほとんど「**対等外交**」は生

き続けている。しかし、中学校の教科書類を見ると「対等」と習う生徒が減りつつあると考えてよいようだ。これに対して、高校生の教科書類では「対等外交」が消える、あるいは「隋の皇帝に臣従しない」というあいまいな言葉に代わるものも現れた。また、山川出版社の『詳説日本史研究』はさらに語気を強め、また一歩進めて「対等の外交をめざしたと考えるのは問題がありあくまで朝貢外交の枠内のものであった」と記載されるものまで登場している。

一、特に高校の教材類での変化が大きい。これを生徒の立場で考えてみると非常に大きな問題を抱えることになるだろう。遣隋使について、小学校ではほぼ全員が「対等外交」と習う、中学ではまだ多くの生徒が「対等外交」と習う。

ところが、高校の授業では「対等の外交をめざしたと考えるのは問題がある」と教わる生徒が確実にいることになる。先の資料では、中学から高校まで山川出版社の教材類で学ぶ生徒は、特に「大きな衝撃」を受けることになろう。混乱すること必至である。「対等外交じゃないの」、「朝貢なんか聞いてないぞ」、「対等と教わったのに、それが問題視されるのか」など。「歴史の真実が教えられていた」と

と考えていた生徒の中には、そのような生徒がほとんどであろうが、混乱が起ころう。

あるいは過去の先生に負の感情を抱く可能性さえある。「小・中学校の先生に嘘を教えられたのか？」など。あるいは逆に、現在の先生に対して疑念を持ったり、混乱する生徒が出てくる可能性もある。「中学では対等と習ったのに、この先生は対等と考えるのは問題があるんだと言う。どっち正しいんだ？」

二、2017(平成29)年 山川出版社 『詳説日本史研究』はその用語が極めて把握しづらい。「対等」というのは問題がある」という記述とともに「自立した」とも書く。「朝貢外交の枠内のものであった」と述べた後に「冊封を求めなかった」と記す。「対等ではないのに自立した」、「朝貢するが冊封体制下にはない」など、明快さに欠けているのではないかと、それらの用語を定義するだけで、それぞれが一つの論文になりそうである。私の推測だが、編集執筆に携わった何人かの学者の好む用語をすべて採用したのではないかと、という表現である。学ぶ生徒の立場を考えているのであろうか。混乱必至である。

三、また、前項の二、ともかかわるが、

同じ出版社でも異なる見解がある。山川出版社の2017年版『詳説日本史研究』などでは「対等」というのは問題、朝貢外交の枠内」とされるのに対し、2025年版『詳説日本史』における「臣従しない」とでは明らかに違いがある。「臣従しない」はほとんど「自立」、「対等」と同義であろう。

ここに私たちが直面する「新しい教科書問題」が顔を出している。歴史の理解は専門家たちの間には異なった見解が存在している。それを学会や研究図書や研究誌に発表することは自由に行われなければならない。その自由が保障されているか否かについてはここでは問わないことにする。

問題の一つは、特に古代史は史料が十分にあるとはいえないだけでなく、歴史という学問の性質から諸説存在するものでもある。その諸説ある問題領域について、教科書執筆を担当する研究者・グループの意向で「一つに決まり」として良いということにはならないだろう。遣隋使については「対等ではない」、「朝貢だ」と理解する研究者がいて、それを支える研究者が増加しているのかもしれないが、相変わらず「対等」と考

える研究者もいるのが現状であろう。そのことは反映されなければならぬのではないだろうか。

この意味で教科書はどうあるべきかが問われている。幾つかの説がある問題については、その代表的な説をとともに載せる必要があるのではないかと。諸説あることを知らせることは生徒に別の意味での「混乱を引き起こす」とことになるのだろうか。実際に、卑弥呼の邪馬台国の所在地について、近畿ヤマトと北部九州という二説あることが明記されている教科書類もある。それが十分な形と云えるかどうかは検討の余地はあるだろうが。遣隋使も少なくとも二つかその説がある。実際に、ある教科書には「対等」と載り、別の教科書では「朝貢」と記載されている。なぜそのどちらか一つだけが書かれなければならないのだろうか。一説、あるいはそれ以上あることがなぜ教科書に書かれなければならないのだろうか。その教科書執筆・編纂者の見解が前面に出すぎているだろうか。数学などとは違い歴史の教科書は性格上、多様な見解が存在する可能性があることなどをも生徒が学ぶ絶好の機会になるであろう。

生徒を単に「教えられる受け身の存在」と考えて教科書は作られているのだろうか。それとは異なり、生徒を自主的に学ぶ主体として見るというやり方があるだろう。関心を育て、また意欲を育てる中で自分から進んで探求する、いわゆるアクティブラ

ーニングと言われる方式がある。

私は教育の現場で諸説を紹介することは、むしろ生徒の勉学意欲を向上させるのではないかと考えている。現在、小学校の社会科の教科書では、「自分で調べる」という課題が必ず出されている。適切な参考史資料が生徒に示されているのか、どんな資料が与えられるべきかについては十分に議論される必要があるだろうが、もちろん今は、インターネットから多様な情報が得られる時代であるから、そのような心配は無用かもしれない。自分で調べ考える方向に向かう必要があるのではないだろうか。

ところが、中学、高校となるにつれてそのような生徒の主体性を育てる観点がなくなり、教科書の執筆者や編集者の見解が前面に押し出され、「これが史実だ。だからそれを覚えておけばいいのだ」という方式になっているのではないかと思われる。知識量も判断力も小学生よりも身につけている中・高校生が自主的に学ぶにつけている中・高校生が自主的に学ぶという状況にないという不合理さがある。受験勉強への対策なのだろうか。むしろ、受験の出題方法を根本的に手直しする必要があるのではないだろうか。

「教科書の在り方をめぐって」の議論が必要であるということをもっと真剣に考えなければならぬであ

ろう。

### 3. 教科書類の変化に対応して

高校生用の教科書類では、2010年代あたりが境目になり、「対等外交」が消えていく傾向にあるようだ。『大学で学ぶ日本の歴史』(注3)という本がある。ここでは、「天子対天子」の国書に対して隋の煬帝が怒る。倭王がみずから天子と名乗ったことが原因であるが、必ずしも倭は隋と対等な関係を目指したわけではない。倭は「任那復興」をめぐる新羅と対立するなか、新羅を牽制しつつ、先進文明を受容する目的で隋に朝貢しようとした。これ以降、倭は中国に冊封を求めずに朝貢していくことになる。いつぼう、高句麗と対立する隋としてはこれを認めざるを得ず裴世清を倭に派遣して倭国の朝貢を歓迎する旨を伝えさせた。大学生ともなれば、「冊封」と「朝貢」の違いぐらいは理解可能であろう。

おおむね、このような表現がされている。この書物では明らかに「対等」が消されて「朝貢」が正しいということが示されている。

一方、『ここまで変わった日本史教科書』(注4)という本がある。期待したのだが、遣隋使に見られる「対等外交」については論じられていなか

った。2010年代から徐々に高校生用の教科書では変化が起こり始めており、さらに同年出版の『大学で学ぶ日本の歴史』がそれに敏感に対応しているにもかかわらず、『隋書』倭国伝が「対等外交」と解釈された時代があつたこと自体を消去しようとしているのだろうか。

(注3) 木村茂光、小山俊樹、戸部良一、深谷幸治著 吉川弘文館2016年第一刷 23頁  
(注4) 高橋秀樹、三谷芳幸、村瀬信一著 吉川弘文館2016年第一刷 205-21頁

### 4. 対等外交が避けられる理由

――一つの仮説――

次節で現在の『隋書』の「天子対天子」についての研究動向を検討するのだが、その前に一つの仮説を立ててみたい。それは、なぜ現在の研究が「対等」を避ける方向にあるのかに對する私の推理からくる。

まず、近畿ヤマトの王権が隋と対等な関係を結ぶ資料は存在しない。例えば、『日本書紀』に見られるのは、対等ではなくむしろ「朝貢」であつた。煬帝からとされている国書に「朝貢」という文字が残されたまま『日本書紀』は書かれている。

また、隋との関係が「対等」である

とすると、なぜ唐とは対等ではなく「朝貢」に逆戻りするのかが説明できない。そこで、遣隋使も対等ではないことにする。このような計算があるのではないのか。

しかしこの解釈もまた大きな壁に突き当たる。つまり、それではなぜ倭国は唐とは白村江で「対等」どころの話ではなく、なぜ戦争にまで突き進んだのだろうか。果たして百濟復興が理由になるのだろうか。この理由付けが弱いものであることは、以下で述べることになる。

**『旧唐書』倭国伝日本国伝と蝦夷国**

京都市 古賀達也

#### 一、九州王朝に服属した蝦夷国

「洛中洛外日記」『旧唐書』倭国伝の「東西五月行、南北三月行」(注①)で、倭国伝(注②)に見える倭国(九州王朝)に「附屬」する「五十餘国」に蝦夷国が含まれることについて論じた。倭国伝には「在新羅東南大海中」とあり、本州島が半島ではなく大海中の島国と認識されていることから(津軽海峡の存在を知っている)、このことを重視すれば、「五十餘国」に津軽海峡を知悉している蝦夷国

(後の陸奥国・出羽国)が含まれると考えた方がよいとした。

これは七世紀後半に蝦夷国が倭国(九州王朝)に服属していたか否かというテーマだ。筆者の考察によれば、七世紀後半頃の蝦夷国は倭国の影響下にあり、その関係を「附屬」と『旧唐書』編者は表したとした。このことを示唆する『日本書紀』斉明五年(六五九)七月条の「伊吉連博徳書」の記事がある(注③)。

「天子問いて曰く、蝦夷は幾種ぞ。使人謹しみて答ふ、類(たぐい)三種有り。遠くは都加留(つかる)と名づけ、次は龜蝦夷(あらいみし)、近くは熟蝦夷(にきえみし)と名づく。今、此(これ)は熟蝦夷。毎歳本國の朝に入貢す。」

唐の天子の質問に対して、蝦夷には都加留と龜蝦夷と熟蝦夷の三種類があると使者は答えている。遠くのが都加留とは津軽地方のことと思われる、その地の蝦夷が津軽海峡の存在を知らないはずがない。従って、倭国を「在新羅東南大海中」の島国と記したのかもしれない。熟蝦夷が毎歳「本國之朝」に入貢するという記述も、倭国に「附屬」する「五十餘国」に蝦夷国が含まれるとする理解を支持している。この場合、本州島や四国も含めて「倭国」と認識していたことになる。いわば「広義の倭国」だ。

## 二、倭国と日本国の国界

倭国の領域「東西五月行」には蝦夷国が「附屬」の「五十餘国」の一つとして含まれ、日本国伝(注④)に見える「其の国界は東西南北各數千里。西界南界は大海に至る。東界、北界は大山が有り、限りと為す。山外は即ち毛人の国」の「国界」とは範圍が異なる。東と北にある大山の外の「毛人の国」をわたしは蝦夷国としたので、七〇一年の倭国(九州王朝)から日本国(大和朝廷)への王朝交代にともない、日本国が倭国の統治領域をそのまま受け継いだとすれば、「国界」も大きくは変わらないはずと考えていたのだが、これは誤解であった。

七世紀以前の九州王朝時代と八世紀以降の大和朝廷時代とは、両国と蝦夷国との関係は異なっており、その関係性の変化が『旧唐書』の「国界」記事にも反映していたのだ。従って、倭国伝では七世紀後半の倭国に「附屬」した「五十餘国」を表す「東西五月行」に蝦夷国は含まれ、王朝交代後の姿を記した日本国伝には山外の別国(毛人の国)として記されたと考えられる。すなわち、七世紀頃には倭国と蝦夷国は主従関係にあり、蝦夷国は倭国の文化(仏教も)を受容し、事実上の朝貢国であったと思われる(注⑤)。そのこと示す記事が『日本書

紀』敏達紀に見える。

「十年の春閏二月に、蝦夷數千、邊境に寇(あたる)ふ。」

是に由りて、其の魁帥(ひと)このかみ)綾糟(あやかす)等を召して、「魁帥は、大毛人なり」詔して曰はく、「惟(おもひ)みるに、爾(おれ)蝦夷を、大足彦天皇の世に、殺すべき者は斬(ころ)し、原(ゆる)すべき者は赦(ゆる)す。今朕(われ)、彼(そ)の前の例に遵(したが)ひて、元惡を誅(ころ)さむとす」とのたまふ。

是(こ)に綾糟等、懼然(おどかしこま)り恐懼(かしこ)みて、乃ち泊瀨の中流に下て、三諸岳に面(むか)ひて、水を敵(す)りて盟(ちか)ひて曰(も)うさく、「臣等蝦夷、今より以後子孫孫、「古語に生兒八十綿連(うみのこのやそつづき)といふ。」清き明き心を用て、天闕(みかど)に事(つか)へ奉(まつ)らむ。臣等、若(も)し盟に違はば、天地の諸神及び天皇の靈、臣が種(つぎ)を絶滅(た)えむとまうす。」『日本書紀』敏達十年(五八二)閏二月条

この記事は三段からなっており、一段目は蝦夷国と倭国との国境で蝦夷の暴動が発生したこと、二段目は倭国王が蝦夷国のリーダーとおぼしき人物、魁帥綾糟らを呼びつけて、大

足彦天皇(景行)の時のように征討軍を派遣するぞと恫喝し、三段目では綾糟らは詫びて、これまで通り臣として服従することを盟約したという内容。すなわち、綾糟らは自らを倭国の臣と称し、倭国と蝦夷国は天皇(天子)と臣の関係であることを現している。これは倭国を中心とする日本版中華思想として、蝦夷国を冊封した記事ではあるまいか。

## 三、王朝交代と蝦夷国の滅亡

『旧唐書』倭国伝の領域「東西五月行」記事と日本国伝の「其の国界は東西南北各數千里。西界、南界は大海に至る。東界、北界は大山が有り、限りと為す。山外は即ち毛人の国」とある領域記事を比べれば、七〇一年の王朝交代後の日本国の領域は倭国よりも縮小していることがわかる。したがって、「山外」の「毛人の国」とは「倭人の国」ではなく蝦夷国と考える他はない。おそらく王朝交代により、蝦夷国は倭国の冊封(附屬)から離脱し、新たな列島の代表王朝となった日本国に附屬しなかったものと思われる。このことを示唆するのが、『続日本紀』以降の六国史などに頻出する蝦夷征討記事だ。以下、WEB論文「東北蝦夷の滅亡史和人による東北地方の侵略・征服」より関連記事を抜粋する。

〔七〇八年〕朝廷、陸奥への進出を本格化。初めて陸奥守に上毛野朝臣小足を任命。遠江・駿河・甲斐・信濃・上野から兵士を徴発し軍団を編成。陸奥国の南半分(福島県)が朝廷の影響下に入る。

〔七〇九年〕蝦夷が越後に侵入。朝廷は、「越後・陸奥二国の蝦夷は野蛮な心があつて馴れ難く、しばしば良民を害する」として征討を指示。陸奥鎮東將軍に巨勢朝臣麻呂、征越後蝦夷將軍に佐伯宿禰石湯を任命。関東と北陸の兵士を集め、陸奥鎮東軍は東山道を、征越後軍は北陸道を北上。石湯の率いる征越後蝦夷軍は越前・越中・越後・佐渡の四国から百艘の船を徴発。船団は最上川河口まで進み、出羽柵を造設。

〔七二二年〕越後国出羽郡、陸奥國の最上・置賜二郡を分割・併合し出羽国を設立。

〔七二四年〕尾張・上野・信濃、越後の民二百戸が出羽柵に入る。諸国農民が数千戸の規模で蝦夷の土地を奪い入植。移住は総計千二百戸におよぶ。

〔七二六年〕巨勢朝臣麻呂が朝廷に建白。「出羽国においては和人が少なく、狄徒も未だ十分に従っていない。土地が肥沃で田野も広大であるから近国の人民を移住させ、狄徒を教え諭すと共に、土地の利益を確保すべきである」との建言に基づき、陸奥国

置賜・最上の二郡と信濃・上野・越前・越後の百姓それぞれ百戸を出羽国に移す。

〔七二八年〕陸奥の南部を分割し、常陸国菊多から亘理までの海岸沿いを石城国、会津をふくめ白河から信夫郡までを石背国とする。

〔七二〇年〕蝦夷の叛乱。按察使の上毛野朝臣広人が殺される。持節征夷將軍と鎮狄將軍が率いる征討軍出動。〔七二一年〕征討軍、蝦夷を千四百人余り、斬首・捕虜にし都に帰還。

〔七二四年(神龜元年)〕海道に蝦夷が反乱。陸奥大椽の佐伯宿禰兒屋麻呂を殺害。朝廷は藤原宇合を持節大將軍に任命。関東地方から三万人の兵士を徴発、これを鎮庄。

〔七二四年〕出羽の蝦狄が叛乱。小野朝臣牛養を鎮狄將軍として派遣。

〔七二五年〕陸奥國の俘囚を伊予國に一四四人、筑紫に五七八人、和泉監に一五人配す。抵抗する蝦夷を数千規模で諸國に配流。

〔七三三年〕大野東人、出羽地方の平定に乗り出す。

〔七三六年〕朝廷は出羽平定作戦を承認。藤原麻呂を持節大使に任命。関東六國から騎兵千人などの征討軍を編成。

〔七三七年〕大野東人が大軍を率い、多賀城を出発。出羽討伐軍は奥羽山脈を越え大室駅に至り、出羽國守の

田辺難破の軍と合流。雄勝峠を越え比羅保許山まで進出するが、蝦夷が反撃の姿勢を示したため撤退。

〔七五〇年〕大和朝廷、桃生柵・雄勝柵などの城柵を設置。

〔七五七年〕藤原惠美朝臣朝獺が陸奥守に就任。

〔七六〇年〕雄勝城が藤原朝獺により確立。没官奴二二三人、女卑二七七人が雄勝の柵戸(きのへ)として送られる。

〔七六二年〕多賀城の大改修が始まる。「不孝・不恭・不友・不順の者」数千を捕え、陸奥に送り込む。

〔七七〇年(宝龜元年)〕蝦夷の宇漢迷公(うかんめのきみ)宇屈波宇(うくはう)、桃生城下を逃亡し賊地にこもり、大和朝廷への朝貢を停止し、「同族を率いて必ず城柵を侵さん」と宣言。朝廷は道嶋嶋足を派遣。

〔七七四年〕大伴駿河麻呂、二万の軍勢を率いて東北に侵攻。東北全土を巻き込む三十八年戦争が始まる。

〔七七六年〕大伴駿河麻呂、出羽国志波で蝦夷軍と対決。蝦夷軍はこれを押し返すが、駿河麻呂は陸奥軍三千人を動員して撃破。

〔七七八年〕出羽の蝦夷が朝廷軍を打ち破る。俘囚の長で陸奥国上治郡の大領、伊治公皆麻呂(いじのきみ・あざまろ)が伊治柵司令官となる。

〔七八〇年〕皆麻呂が蜂起。陸奥国按

察使の紀広純らを殺害。多賀城を焼き落とす。朝廷は藤原繼繩を征東大使、大伴益立・紀古佐美を征東副使とする討伐軍を編成。数万の兵力で多賀城を奪回するが、皆麻呂は一年にわたり抵抗を続ける。反乱は出羽地方へも拡大。朝廷は出羽鎮狄將軍に阿倍家麻呂を任命。

〔七八四年〕大伴家持を征東將軍として陸奥に派遣。高齡の為に死亡。

〔七八八年〕桓武天皇、紀古佐美を征夷大將軍に任命。東海・東山・坂東から兵員を集める。日高見國の蝦夷は胆沢の大墓公阿弓流為(たものきみ・あてるい)と磐員公母礼(いわぐのきみ・もれい)を指導者として防衛体制を固める。

〔七八九年〕三月、五万の大軍を率いて紀古佐美は多賀城を出発。蝦夷の集落十四村・家人八百戸を焼き払いながら侵攻。五月末、朝廷軍は惨敗。九月、帰京した紀古佐美は征夷大將軍の位を剥奪される。

〔七九一年〕大伴弟麻呂を征夷大使に任命。百濟王俊哲、坂上田村麻呂ら四人が征夷副使となり、十万の大軍を編成。

〔七九二年〕大伴弟麻呂、坂上田村麻呂に率いられた第二次征東軍が侵攻。十万余の兵力で攻撃するが制圧に失敗。

〔七九四年〕朝廷軍十万が日高見國

へ侵攻開始。関東を中心に九千人の諸国民が伊治城下の旧蝦夷領に入植〔七九七年〕坂上田村麻呂を征夷大将軍に任命。

〔八〇一年〕田村麻呂三回目の日高見国攻略作戦。四万の軍が胆沢の阿弓流為軍を破る。

〔八〇二年〕田村麻呂、阿弓流為の本拠地に胆沢城を造築。多賀城から鎮守府を遷す。関東・甲信越から四千人が柵戸として胆沢城下に送り込まれる。四月、阿弓流為と母礼は生命の安全を条件とし、田村麻呂に降伏。八月、朝廷は阿弓流為と母礼を河内国杜山で斬刑に処す。

以上のように九世紀初頭、蝦夷国は大和朝廷に制圧され、陸奥国・出羽国として日本国の律令体制に組み込まれた。こうした列島内の倭国・日本国・蝦夷国の興亡史を見たとき、七世紀の倭国と蝦夷国は主従関係にあり、倭国から日本国への王朝交代を期に蝦夷国は独立を果たそうとしたものの、新たな列島の代表王朝となった大和朝廷の過酷な入植政策と軍事侵攻により滅んだものと思われる。

#### 四、蝦夷国と倭国は「温泉大国」

先日、WEB記事を読んでいて、面白いことに気づいた。それは蝦夷国

と倭国(九州王朝)が共に「温泉大国」と解しうる次の記事だ。

#### 【以下、要約して転載】

日本は二八〇〇を超える温泉地を有する温泉大国ですが、一番「温泉の湧出量」が多い都道府県はどこかご存知でしょうか。今回、アンケートで尋ねたところ、回答者全体の約六割が正解しました。

LIMO編集部が全国の一〇歳代〜六〇歳代の男女一〇〇名を対象に、「北海道」「青森県」「大分県」「鹿児島県」の四択のうち、「日本で一番『温泉の湧出量』が多い都道府県はどこか」というアンケートを取ったところ、全体の六二%が大分県と回答。次に多かったのが同率一六%の北海道と鹿児島県。そして六%の青森県と続きました。

湧出量とは一分間に採取できる湯量のこと。自然に湧き出る量だけでなく、掘削した量やポンプなどで汲み上げた量を合計した値です。ちなみに各県にある温泉地の数は、多い順で次の通りです。

北海道 二二〇 青森県 一二五  
鹿児島県 八七 大分県 六三

環境省「令和四年度温泉利用状況」によると、日本で一番「温泉の湧出量」が多いのは大分県です。湧出量は二九万五七〇八リットル/分。別府温

泉、湯布院温泉などで知られる同県は、一八ある市町村のうち一六市町村で温泉が湧出しており、源泉総数も五〇九〇と全国一位。特に別府市や由布市などで源泉数が多くなっています。

二番目に多いのは北海道の一九万六二六二リットル/分。北海道は温泉地数では全国一位。三番目は指宿温泉や霧島温泉が有名な鹿児島県の一七万五一一四リットル/分。四番目は青森県の一三万八五九リットル/分。ちなみに全国には二八七九もの温泉地があり、湧出量の合計は二五一一万五二七二リットル/分。日本では一日で三六億リットル以上もの温泉が湧いているのです。

#### 《都道府県別温泉の湧出量順位》 (単位リットル/分)

- 一位 大分 二九万五七〇八
- 二位 北海道 一九万六二六二
- 三位 鹿児島 一七万五一一四
- 四位 青森 一三万八五五九
- 五位 熊本 一二万九九六二
- 六位 岩手 一一万二〇一八
- 七位 静岡 一一万 四九五
- 八位 長野 一〇万四七一六
- 九位 秋田 八万八四一六
- 十位 福島 七万七三七九

#### 【転載おわり】

この記事を読み、温泉湧出量上位

県の大半を蝦夷国(東北地方)と倭国(九州)が占めていることに気づいた。面白いことに、九州王朝から大和朝廷への王朝交代後(八世紀)において、大和朝廷の支配侵攻に最も烈しく抵抗したのが、東北の蝦夷国と南の隼人(薩摩)他だ。薩摩には大宮姫伝説(注⑥)でも有名な指宿温泉もある。これらは偶然かもしれないが、「温泉」という切り口で古代史研究するのも面白そうだ。

そういえば、和田家文書調査のため津軽に行ったとき、古田武彦先生から「津軽ではどこを掘ってもお湯(温泉)が出る」と教えて頂いたことを思い出した。わたしが三十代の頃のことである。(令和六年(二〇二五)六月九日、改稿筆了)

#### (注)

- ①古賀達也「洛中洛外日記」三三八五話(2024/12/03) 『旧唐書』倭国伝の「東西五月行、南北三月行」(一)“
- ②『旧唐書』倭国伝冒頭の記事。  
「倭國者、古倭奴國也。去京師一萬四千里、在新羅東南大海中。依山島而居、東西五月行、南北三月行。(中略)四面小島、五十餘國、皆附屬焉。」
- ③『日本書紀』斉明五年(六五九)七月条に次の蝦夷関連記事がある。  
秋七月丙子朔戊寅、遣小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥、使於唐

國。仍以道輿蝦夷男女二人示唐天子。伊吉連博德書曰「(前略)天子問曰、此等蝦夷國有何方。使人謹答、國有東北。天子問曰、蝦夷幾種。使人謹答、類有三種。遠者名都加留、次者鹿蝦夷、近者名熟蝦夷。今此熟蝦夷每歲入貢本國之朝。(後略)」

難波吉士男人書曰「向大唐大使觸嶋而覆、副使親觀天子奉示蝦夷。於是蝦夷以白鹿皮一・弓三・箭八十獻于天子。」

④『旧唐書』日本国伝冒頭の記事。「日本國者、倭國之別種也。以其國在日邊、故以日本爲名。或曰、倭國自惡其名不雅、改爲日本。或云、日本舊小國、併倭國之地。(中略)又云、其國界東西南北各數千里、西界、南界咸至大海、東界、北界有大山爲限、山外即毛人之國。」

⑤古賀達也「洛中洛外日記」二三八一〜二三七九話(2021/02/15〜03/02)「蝦夷国」を考究する(一)〜(一一) 同「蝦夷国への仏教東流伝承」―羽黒山「勝照四年」棟札の証言―『古田史学会報』一七三号、二〇二二年。

⑥大宮姫を九州王朝の皇女とする説を筆者や正木裕氏が発表している。古賀達也「最後の九州王朝―鹿児島県「大宮姫伝説」の分析―」『市民の古代』一〇集、新泉社、一九八八年。

正木裕「大宮姫と倭姫王・薩末比売」『倭国古伝 姫と英雄と神々の古

代史』(『古代に真実を求めて』二二二集 明石書店、二〇一九年。

### 藤原京・平城京出土の荷札 木簡は何を示すか

八尾市 服部静尚

#### 一、荷札木簡とは何か

左に例を示す荷札木簡に記された文字から、各地国郡から中央へ集荷された税(租庸調)の一部に付けられた荷札であることが判ります。

※藤原宮跡東方官衙北地区出土「己亥年若狭国小丹御調塩」、

※平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構出土「備後国沼隈郡調鉄十口」、

※平城宮造酒司地区出土「能登国能登郡鹿嶋郷望理里調熬海鼠六口」、

※平城京左京二条二坊長屋王邸出土「安遠里秦人部古生/御調塩三斗」、

※平城宮宮城東南隅地区出土「伊勢国度会郡継椅郷庸米四斗」

(1) 律令による租の徴収規定と実状

租は基本イネです。「倉貯積条」には「倉に貯積するにあたって、稻・穀・粟は貯蔵年数九年間までとすること。雑穀は二年間まで貯蔵すること。糶(干し飯)は二〇年間貯蔵すること。」

とあります。租としてのイネは、原則各国郡に設けられた正倉に収納されて、正税(大税)呼ばれる地方財政の財源となっていました。つまり、租の荷札木簡は存在しないのです。実際、租の荷札木簡は出土していません。

ちなみに、中国唐では中央の尚書戸部度支司による予算編成(支度国用)に基づき、各地の税物は送京分・外配分・留州分に振り分けられるのですが、我が国の律令には外配規定が無いのです。民部省主税寮で「倉の出納諸国の田租・春米のことを管理管掌する」のみで、実質の所は各地方で国司らが管理していたのです。

#### (2) 調

調は基本布です。「賦役令―調絹絶条」には「調の絹、絶、糸、綿、布は、いづれも郷土の所出に應じること。正丁一人に、絹・絶八尺五寸、(中略)糸八両、綿一斤、布二丈六尺。(中略)もし調を雑物で輸納するならば、鉄十斤、鉄三口。塩三斗、鮑十八斤、鯉三十五斤、鳥賊三〇斤、螺貝三十二斤、干海鼠二十六斤、干雜魚、乾魚百斤、紫海苔四十八斤、雜藻百六十斤、海藻百三十斤、あらめ二百六十斤、みる百三十斤、てんぐさ百二十斤、雜魚乾肉六斗、めかぶ八斗、未滑海藻一石、蒜一石二斗、鳴蒜一石二斗、鮑の鮓二斗、貽貝の鮓三斗、白貝なまり三斗、辛螺六斗、貽貝六斗、海細螺一石、うに六

斗、かせえ六斗、雜魚の鮓五斗、近江の鮓五斗、煮塩の鮓四斗、なまり節二十五斤、堅魚煎汁四升。(以下省略)」とあります。つまり、調は原則反物で徴収されますが、場合によっては地方の名産物での納税も許可されていたのです。大蔵省が諸国の調を徴収し、民部省主計寮がその調を計納配分するので。

普通に考えると、反物の荷札木簡が多く出土するはずですが、実はほとんど出土していません。藤原京・平城京での出土は、平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構出土の「左兵衛下総国埴生郡大生直野上養布十段」のみです。後は、荷札ではなくて付札で次の三例があります。平城宮内裏北方官衙地区出土の付札「中緑絹」、平城宮内裏北方官衙地区出土の付札「青染絹」。そして、藤原京・平城京とは異なりますが、大宰府条坊跡では大宰府条坊跡右郭十八条七・八坊出土「基肆郡布七端絶六匹□□一匹□□(の箱)」という箱書があります。調の反物には基本的に荷札木簡が付けられていなかったようです。

#### (3) 庸

本来庸は労役が課せられる歳役ですが、労役の代りに庸米・庸布を納入させていたものです。

「倉庫令―調庸物送京条」には「調庸などの物を京に送るときには、みな実際に送る物の数・色目（種目・名称）に依つて、それぞれ簿を一通造ること。国は納品書に、明らかに進納する物の種目・数量を記載して、綱丁等に預けて、各所司に送らせること。」とあり、これが荷札木簡に通ずるわけです。

### 二、出土する荷札木簡の性質

前項で述べたように、荷札木簡は反物では無くして諸国の名産物で貢納する場合に付けられるものと、本来の庸つまり労役では無くして、庸米などとして貢納する場合に付けられるものでした。当然、名産物貢納する諸国の荷札木簡が多く出土します。逆に言うと反物で貢納する諸国の荷札木簡は出土が少ないのです。この点を考慮して出土分布を考察しなければならぬのです。

### 三、荷札木簡の国別出土数

次の表に飛鳥地域・藤原京・平城京での荷札木簡国別出土数を示します。この表は奈良文化財研究所が公開する「木簡庫」から、国名が明確な荷札木簡をカウントしたものです。

(1) 平城京のデータを見ると、出土数は参河国・伊豆国・近江国・若狭国・駿河国・隠岐国の順になっています。

特に伊豆国や隠岐国など国の規模から見て不思議な順序に見えます。しかしその内容を見ると、次のようにこれらの国では調を（反物では無くして）名産物での貢納が多かったため、そこに付けられた荷札木簡の出土が多いという結果になったことが判ります。

☆参河国木簡一〇二件の内、三〇件が楚割（干魚か）、十六件が贅米、塩が三件、魚が二件、庸米が一件。

※伊豆国木簡九十七件の内、六十五件が調堅魚、一件が米（庸米か）。

▲若狭国木簡、塩が二十七件、海産物十三件、庸粟が一件、米（庸米か）が一件。

◆隠岐国木簡、海藻が十七件、軍布が六件、鳥賊が六件、鮑が五件など。

(2) 飛鳥および藤原京よりの出土が見られない甲斐国・相模国・上総国・飛騨国・陸奥国・出羽国・加賀国・能登国・安芸国・長門国・石見国は平城京に至ってもその出土数は少ない。これらの国々が藤原京の時代にその勢力下に無かったと考えるよりは、これらの国郡の調は本来の反物で貢納されていたので、荷札木簡を使つた貢納が少なかったと考える方に蓋然性があります。

(3) 飛鳥および藤原京よりの出土

が見られない筑前国をはじめとする西海道の国々は、やはり平城京に至つてもその出土数は少ないことが表より判ります。その少ない木簡の中に次の六件があります。

①平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構で出土の「筑紫大宰進上肥後国託麻郡：□子紫草」

②平城京左京七条一坊十六坪東一坊大路西側溝で出土の「大宰府貢交易油三斗□□・○寶龜三年料」

③平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構で出土の「筑紫大宰進上肥後国託麻郡」

④平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構で出土の「筑紫大宰進上筑前国嘉麻郡殖種」

⑤平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構で出土の「筑紫大宰進上薩麻国殖」

⑥平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構で出土の「筑紫大宰進上筑前国穂波」

このように、九州地域の国郡からの荷札木簡は極めて少ないことより、これらは大宰府に輸納されていたと推測されます。いくら統治領域と言つても、全国から均等に京への調輸納が行われていたとは考えにくいのです。（地）租が各地の正倉に輸納されたことと同様のことが調でも行われていたようです。

九州からの荷札木簡の出土が少ないから、当時九州は大和朝廷の勢力下に無かったというような乱暴な解釈は非常に危うい論理であることが判つていただけたらと思います。

(4) 荷札木簡の出土を調べている中で、出土地に偏りがあることに気付きました。例えば大膳職で「諸国の調の雑物のこと及び、天皇を除く朝廷職員調理など」を管掌します。大炊寮では「諸国の春米・雑穀の諸司への分給」を管掌します。当然、役所毎に荷札木簡の廃棄数は異なり偏りがあります。そのような中で発掘出土ですから、発掘の進み具合によつても国別出土数が変わることは容易に予測されるのです。

**東京古田会「月例会報告」⑫**  
※文責：新保 高之

●二〇二五年六月度 佃区民館にて、参加者は会場十五名、リモート七名程度。

第一部(研究発表と懇談会) 司会は齋藤事務局長

【研究発表】「語部」と歩く東日流の旅の報告(安彦克己氏)(一)経緯・予定の発表が延期されたため、急遽表題に絡めた発表があった。(二)全

体内容：最初に、沖ノ島で発見された金象嵌付き矛に触れながら「沖ノ島」を古田先生と訪れた時の様子、続いて表題旅行地等について旅程にそって説明があった。(三) 質疑・感想等：旅行報告に関しては参加者からも補足的な解説(①難読の善知鳥(うとう)神社が他の地域にも存在、②東北地方の鉄は北方からもたらされた、等)があった。③質疑に伴い様々な意見や感想が飛び交って大変面白かった。引き続き、懇談会のフリートークングに進んだ。(発表八〇分・質疑十分)

【懇談会】 安彦会長の発表に関連して、①沖ノ島、②石塔山等が話題になった。(十五分)

第二部(勉強会と読書会) 司会は新保幹事

【勉強会】「古田武彦『盗まれた神話』その七」(一) 対象は、①第十章「神武東征ははたして架空か」と②第十一章「侵略の大義名分」。(二) 要点・質疑等(第十章)：【要点】 本章は八節から構成される。古田武彦先生は、通説論者が盛んに喧伝する「神武東征架空説」を、多角的な観点から痛切に批判されている。【質疑等】 ①当時のヤマトは、国造や県主(「あがた」とは我地のこと)達が支配する小国の連合体。その地への侵略戦争。②ヤマトへの東征はあったが、『記紀』の

記述は九州王朝の遠賀川流域侵略譚からの流用かも。(三) 要点・質疑等(第十一章)：【要点】 本章は五節から構成される。古田武彦先生は、神武天皇は近畿天皇家の初代天皇という位置づけではなく、奈良にあった前王朝を武力で倒した革命者とする『日本書紀』編者の認識を導き出され、戦後史学の『日本書紀』に対する理解に鋭い批判の目を向けておられる。【質疑等】 ①最終節「免責」の思想 関連した質疑(「原罪」の削除や「免罪」の意味が不明確が多かった。②「神武東征」は唐対策として『書紀』の編者がこうした説話を作ったとの意見も。(発表・質疑四〇分)

【読書会】「岩波文庫『日本書紀』持統紀その七」(一) 対象項目：持統七年条。トピックは「大赦」と「筑紫太宰」。(二) 主要記事と質疑等：①七年条には殆ど大きな記事がない。②八〇歳以上の人々への物品賜与に関し、当時の健康な人の寿命が現在との同じだったかで、様々な意見があった。③秋九月条の「清御原天皇」は『古事記』序文とほぼ同じだが、『日本書紀』の他の天皇紀では「淨御原天皇」である。(解説・質疑二五分)

東京古田会定時総会報告

\* 5月31日 於：浜町区民館

東京古田会定時総会が開催されました。提案された議案を討議し全て承認されました。24年度決算・25年度予算並びに活動方針・25年度役員は以下の通りです。  
第2部の講演会は今年度は國枝浩氏の発表で、テーマは「古田説批判から通説批判へ」批判の根拠と方法などについて」でした。発表後は活発な質疑応答がなされ閉会となりました。

2024年度決算書

収入の部	当期累計	備考
前期繰越金	841,722	
年会費	504,000	会員数 130名×4000円=520000
133名×4000円	16,000	
	8,000	(次年度分 2名×4000円)
参加費	95,000	12回 190名参加
	21,000	5回 42名参加
寄付金	402,000	
受取利息	184	ゆうちょ総合口座
USB代販売	500	
預り金(誤入金)	15,848	
収入合計	1,904,254	①
支出の部	当期累計	備考
会報製作費	261,712	6回発行
会報配送料(プリントインから)	31,680	印刷会社から事務局へ配送
会報送料(後納郵便料)	123,336	会員へ
会報編集費	60,000	
送料(宅配料・郵送料)	10,798	
運搬費	10,600	
HP維持・管理費	184,430	ホームページ改修費等
HPドメイン賃借料	22,000	ホームページの用
サーバー年間賃借料	1,870	レンタルサーバー
交通費	141,820	幹事会12回 研究会5回
通信費(切手、ハガキ等)	0	
会場使用料(月例会)	44,500	月例会 12回
会場使用料(和田家文書研究会)	6,300	研究会 5回
コピー代・印刷代	41,485	例会資料・チラシ
モバイルWi-Fiレンタル	5,460	1回@870
備品購入(ノートパソコン)	103,760	Hpパソコン 2024/12購入
支払手数料(振込料等)	522	
事務消耗品費	9,308	会報送付用角2封筒購入等
講演会費用	11,472	講演会資料代
諸雑費	1,782	
預り金清算(誤入金)	15,848	誤入金返却
	1,088,683	②
当期収支差	815,571	①-②
前期繰越金	841,722	

2025年度役員と担当

会長	安彦 克己	(再任)
副会長	橘高 修	(再任)：「古代史セミナー担当」
事務局長	斎藤 隆雄	(再任)
会計	中村 忠夫	(再任)：旅行会、リモート会議担当
会計監査	小嶋 康寛	(再任)
幹事	新保 高之	(再任)：勉強会担当兼施設担当
幹事	西坂 久和	(再任)
幹事	安信 千津子	(再任)：会計補佐
幹事	國枝 浩	(再任)

\* 田中巖氏(顧問)は退任となりました。長い間ありがとうございました。

**2025年度活動方針**

- 講演会**  
【定時総会講演】  
タイトル：古田説批判から通説批判へ―批判の根拠と方法などについて―  
講師：國枝 浩氏  
実施日：5月31日(土)午後2時から  
会場：浜町区民館 洋室5号
- 「古田武彦記念古代史セミナー2025」の実施**  
テーマ：「邪馬台国」  
実施日：11月8日(土)～9日(日)  
会場：大学セミナーハウス(八王子)  
主催：公益財団法人大学セミナーハウス  
協力：多元的古代研究会、東京古田会、古田史学の会、東海古代研究会
- 東京古田会ニュースの隔月(奇数月)発行(222号～227号)**
- 研修旅行**  
●「語部と歩く東日流」の旅 5月13日(火)～16日(金)  
●「九州王朝の痕跡と筑紫舞を訪ねる」旅 10月21日(火)～24日(金)
- 月例会**  
毎月最終土曜日午後1時から午後5時 於中央区区民館  
ハイブリッド方式にて開催の予定  
第1部  
・委員の研究発表・意見交換  
・懇親会(フリートーキング:テーマは部度)  
第2部  
・古田武彦氏の著作を読む 初期三部作  
・日本書紀を読む
- 和田家文書研究会**  
奇数月(11月を除く)の第2土曜日午後2時から5時
- 古田史学の普及活動**  
●「東京古田会ニュース」送付  
マスコミ各社(中央紙、NHK、歴史雑誌等)及び国会図書館

**2025年度予算**

収入の部		計
前期繰越金 (前受け会費8000円含む)		823,571
年会費 124名×4000円		496,000
参加費	例会	90,000
	研究会	20,000
寄付金		200,000
受取利息	ゆうちょ	150
当期収入合計		1,629,721
支出の部		計
会報製作費	(有)プリントイン	260,000
280部×6回=1680部	2025年度 製作費&配達料 各一部155円	計260,000
会報送料 (ゆうちょ)		110,000
会報編集費		60,000
送料 (宅配・郵送代・運搬費・通信費)		15,000
交通費	幹事会 他	150,000
会場使用料	月例会 @3700×6回	23,000
	和田家文書研究会 @1100×5回	5,500
HP維持・管理費	ホームページ月々更新作業等	150,000
HPドメイン・メールアドレス年間賃借料		22,000
サーバー年間賃借料	ホームページ用レンタルサーバー	2,000
コピー代・印刷代	例会資料・角封筒	50,000
支払手数料	銀行振込等	1,000
事務消耗品費	古田会ニュース発送用封筒等	10,000
雑支出 (書籍資料等購入)		10,000
講演諸経費		50,000
当期支出合計		918,500

**研修旅行のお知らせ**  
十月二十一(火)～二十四(金)  
福岡空港 十時到着ロビー集合

行先 福岡宮地嶽神社奉納「筑紫舞」  
「邪馬壹国」弥生遺跡群と金田城

一日目 主な訪問先(予定)

那珂川市資料室・安徳台遺跡・裂田の溝・比恵那珂遺跡群・生の松原(元寇防塁)・福岡市博物館

二日目

フェリーで大島(安昌院・安倍宗任の墓所)・宗像大社(中津宮)・宗像大社宝物館・ジェットフェリーで対馬

三日目

上対馬歴史民俗資料館・鰐浦(和珥津峯町歴史資料室・海神社・和多都美御子神社(名神大社)・豊玉町郷土館・和多都美神社・阿麻氏留神社・小茂田神社・石屋根倉庫群

四日目

古代山城(金田城)・対馬博物館・対馬空港全日空十五時〇五分発・福岡空港 十五時三十五分着 解散

**費用概算 十二万五千円十五名計算**  
宿泊代・四日間(朝昼夕)食事代・現地交通費・拝観料・旅行障害保険料等すべての料金を含む。

**お知らせ**

月例会・研究会の予定

●8月月例会

日時：8月30日(土)午後1時より  
会場：佃区民館洋室3号

【第1部】\*研究発表

発表者：國枝浩氏

テーマ：「対等外交」は教科書から消えるのか

\*懇談会 フリートーキング

【第2部】新保高之氏

\*勉強会 古田武彦論稿より

『盗まれた神話』その9

\*読書会 日本書記を読む

『持統天皇紀』その9

(オンラインでも参加できます)

(参加費・500円)

●9月月例会

日時：9月27日(土)午後1時より  
会場：未定 HPに掲載します。

【第1部】

\*研究発表

発表者：橘高修氏

テーマ：「女王国のゆくえ」

\*懇談会 フリートーキング

【第2部】新保高之氏

\*勉強会 古田武彦論稿より

『盗まれた神話』まとめ

\*読書会 日本書記を読む

『持統天皇紀』まとめ

●『和田家文書』研究会

日時：9月13日(土)午後2時より  
テーマ：陸奥話記と『和田家文書』その4・菊地栄吾氏 他

●「東京古田会ニュース」原稿募集!

東京古田会では東京古田会ニュースへ掲載する論文・小論・古代史雑感などを募集しています。住所・氏名を必ず明記のうえ、5,000字程度以内にまとめて、左記へお送りください。ただし、特定個人への中傷や古代史と無関係な場合は掲載をお断りすることがあります。予めご了承ください。また、他紙などへ既に投稿しているものとまったく同じ内容の原稿は原則として掲載できません。掲載の可否については編集会議で決定させていただきます。斎藤隆雄宛  
送付先：saitaka7076@yahoo.co.jp

●新入会員募集!

東京古田会は新規会員を常時募集しています。古田武彦や古代史に興味のある方、どうぞお気軽にお問合せ下さい。また、入会ご希望の方や、本会にご興味のある知人・友人の方をご紹介ください。入会希望の方は事務局に電話又はメールで住所・氏名等ご連絡ください。年会費は4千円になります。